

42578

教科書文庫

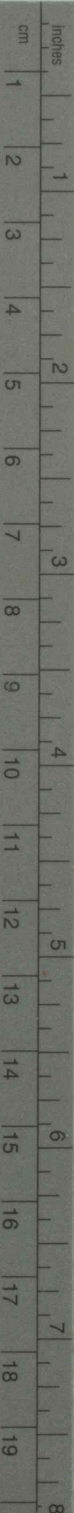
4
810
51-1919
20003 02262

# Kodak Gray Scale



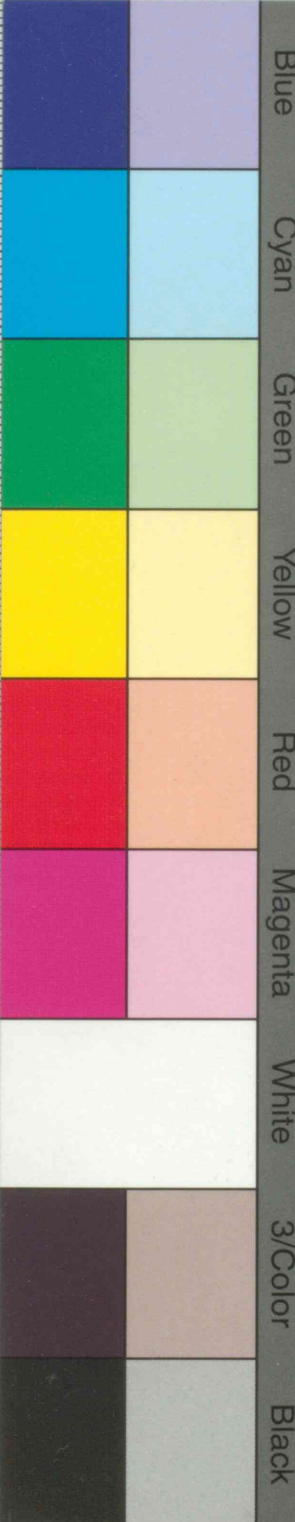
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19

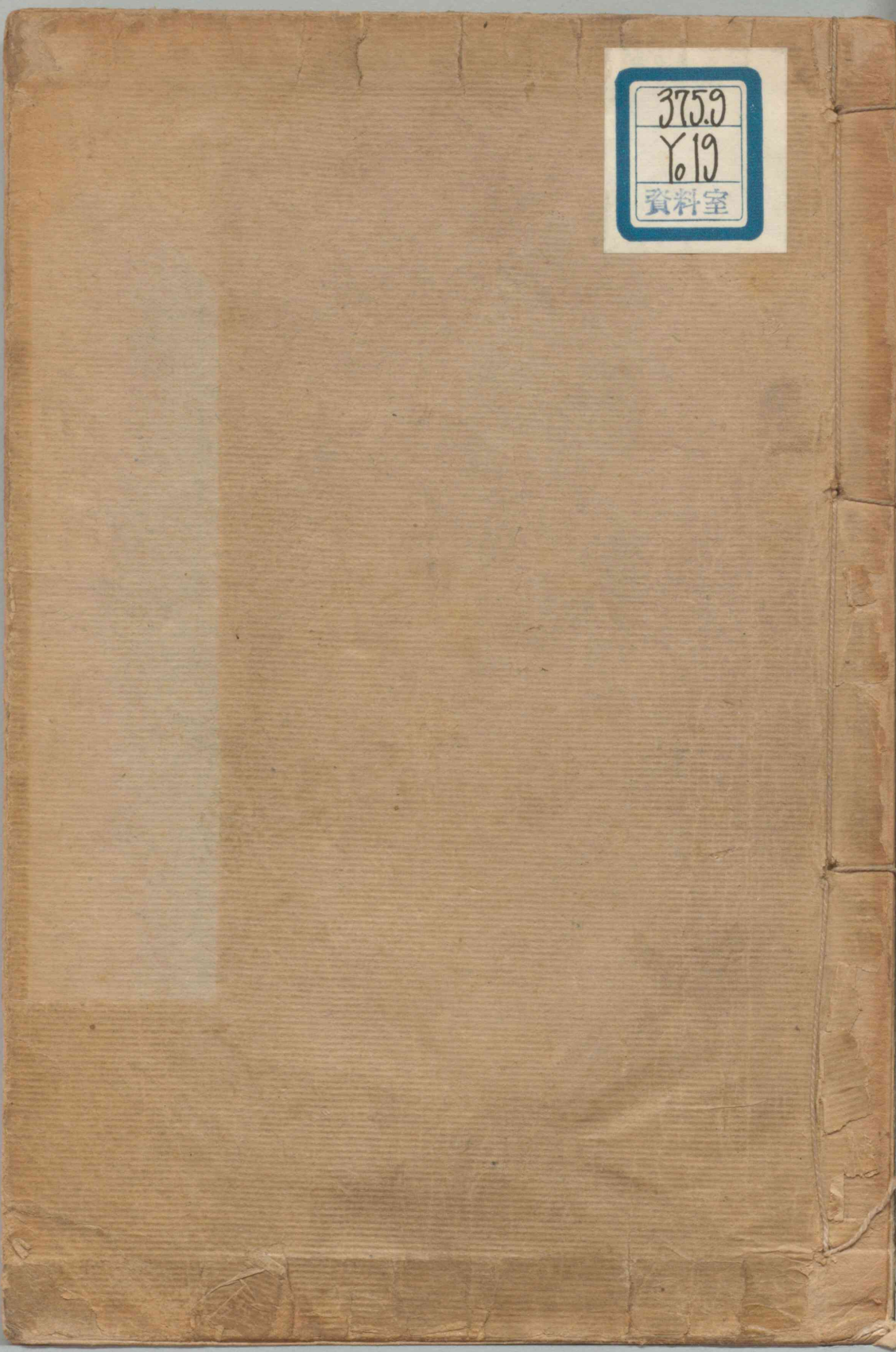


# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9  
Y619  
資料室



資料室

3959  
Y019



文部省檢定  
師範學校國語教科書

大正八年一月十日

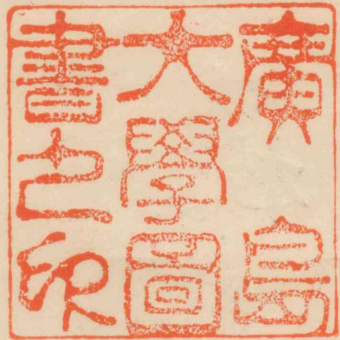
吉田彌平編

本科用

師範學校  
國文教科書

東京 光風館藏版

卷二



師範學校 國文教科書 本科用 卷二

目次

一 月の天橋	徳富健次郎	一頁
二 空行く雁	曾我物語	七
三 田園雜興	大町桂月	二
四 武藏野	國木田獨步	一七
五 高空飛行その一		二五
六 高空飛行その二		三
七 戦場電話		三六

目次

八	伊藤公ヲ誅フ	井上馨	四〇
九	本多重次	新井白石	四〇
一〇	利根川の秋曉	徳富健次郎	五一
一一	やつかほ(短歌)		五五
一二	ワイマールより(候文)	藤代禎輔	五七
一三	山室と鈴屋	芳賀矢一	六四
一四	遼東の月	小笠原長生	七三
一五	アルプス越その一		七五
一六	アルプス越その二		八二
一七	壺	柴田鳩翁	八六
一八	雪前雪後	幸田露伴	九〇

一九	釜盗人	橘成季	九七
二〇	古今千遍(候文)	雨森芳洲	九八
二一	四季の月(今様歌)	石川依平	一〇五
二二	三浦路	川上眉山	一〇九
二三	友に寄す(候文)	高山樗牛	一一三
二四	金ヶ崎懐古	菊池幽芳	一二九
二五	表忠塔	徳富健次郎	一三六
二六	梅	藤岡作太郎	一三一
二七	鶯(新體詩)	島崎藤村	一三六
二八	村上義光	〔太平記〕	一三九
二九	殿中の刃傷	村上浪六	一四六

三〇	松島	田山花袋	一五
三一	氷川清話	勝海舟	一六
三二	南洲遺訓	西郷南洲	一七
三三	西郷南洲論その一	尾崎行雄	一七
三四	西郷南洲論その二	尾崎行雄	一七

附録

第二編 漢字

一	漢字の起原	一
二	漢字の變遷	七
三	漢字の形體	八
四	漢字の部首	一六



師範學校 國文教科書 本科用卷二

徳富健次郎

文學者。藤花と號す。明治元年生。

一月の天橋

徳富健次郎

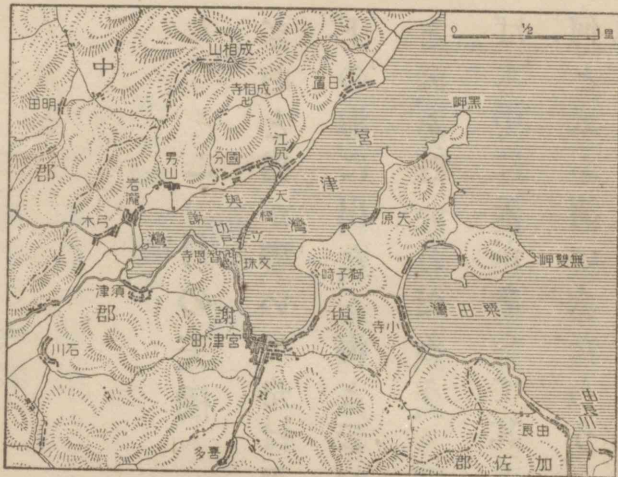
ぎいと櫓が響いて、舟は墨染の濃い松陰から白々とした月下の海に出た。海と云つても、浅い洲の上の水である。何と云ふ好い月だろう。雲一つ無い空にのみ照るかと思へば水中に天があつて、其處にも月は壁の如くに光つて居る。何と云ふ清い水だらう。月明りにも水底の砂が分明に數へられる。我等は今銀河を渡つて居るのではあるまいか。

船頭よ、徐かに舟をやつてくれ。もつと徐かにやつてくれ。

併し、如何程徐かに舟をやつても、彼岸は近い。するくと舟はもう切戸の渡をこして、天橋の渚に着いてしまつた。

舟から上つて踏む白砂は、もう天橋立である。此處らは植ゑついで間もないと見えて、松は稚木で、疎らである。月光に雪

と輝く砂を踏んで次第に奥へ入つて往く。歩むにつれて、松影は段々深くなり、はては、月光より松の影が多くなつた。



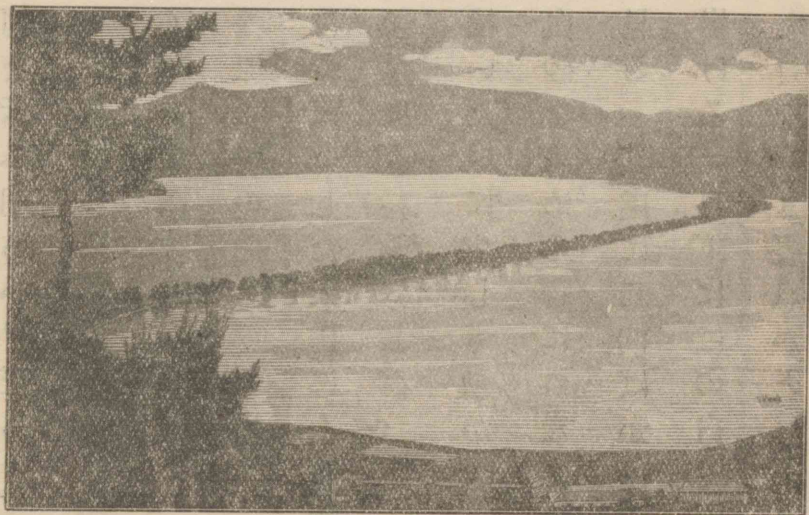
天橋立附近地圖

何と云ふ明るい月だらう。仰げば、松の一葉々々が白金のピンを敷へる様に讀まれ、俯く砂には、又一葉々々の影が黒く鮮かに讀まれる。

松原の路の曲る處に出た。暫し松の幹に倚つて立つた。

ひつそりした天橋に人籟絶えて、唯何處からともなくざあざあといふ響がする。松風か。否、足下の松影は濃い墨で描いた様に少しも動かぬ。音響は與謝の海が天橋一里の

白砂を舐める響に外ならぬ。其の響にひかれて、汀に出て見る。其處に二間ばかりの花崗石のベンチがある。腰を掛ける。月下にほの白く眠る與謝の海、其の懷には壁の様な月を抱き、寢息かとはかりざぶり、又ざぶりと、白砂にこぼ



れる漣は、まるで眞珠をこぼすやう。海の南に半圓形に山根に沿うて紅寶石や琥珀の光が點々と灣を縁取つて居るのは、即ち宮津町である。ふと此方の海の上に、不思議なものが現れた。きらくとした明珠の幾段にも列んだ<sup>た</sup>老<sup>お</sup>大<sup>お</sup>な<sup>な</sup>横<sup>よこ</sup>長<sup>なが</sup>い<sup>い</sup>物<sup>もの</sup>である。龍宮城の出現かと思つて、それは宮津の方へと動いて

行く。や、暫く其の行方を見送る。龍宮城は彼の宮津灣頭百千の龍燈きらめく邊にびたりと附いてしまつた。龍宮城が移動すると見たのは、即ち今日の最終の連絡船が宮津を指して行つたのであつた。あとは唯、慰した様な與謝の海、照りまさる月の空と靜かに相抱いて、一里の松原枝も鳴さぬ天橋立の長い汀に傍うてざぶり又ざぶりと、漣のささめくばかりである。

汀から松原に戻つて、また奥へくと砂路を歩む。さくさくと砂を踏む足音の絶間に、波のさゝめきが慕つて來る。幽かに蟲の音がする。松影は益、深くなつて、はては砂の上に零れる月影がちらくちらくと螢ほどに細かく、疎らになつた。

橋立明神

もとは興謝宮  
とて切戸の文  
珠堂の邊にあ  
りしならんと  
いふ。

と見ると、こゝにひつそりと鎮まります社がある。大方橋立明神と云ふのであらう。松影を浴びた其の宮には、人影もない、人聲もない、燈明一つ點つて居ない。余は其處の松に倚りかゝつて、良久しく歸るを忘れて居た。

大分經つて、松影から月下に出、砂路をぶらりくと切戸の渡に來た。切戸の水は全く銀河の如く清い。汀に立つて向ふを見れば、眞黒い彼岸に唯一つ赤い燈が見える。文珠の渡守の小舎の燈である。

「おゝい」と渡守を呼ぶ余の聲が震へて銀河を渡る前、余は月の天橋の端に立つて暫く其の燈を眺めて居た。(死の蔭に)

二 空行く雁

一萬  
後に曾我十郎  
祐成。  
箱王  
後に曾我五郎  
時政。

曾我祐成

曾我時政

河津祐泰

伊東祐親

工藤祐家

工藤家次

伊東祐次

工藤祐經

曾我殿

曾我太郎祐  
信。一萬箱王  
の母、夫河津  
三郎祐泰の死  
せし後兩兒を  
伴うて祐信に  
再歸す。

頃は人皇第八十一代安德天皇の養和元年、あらたまの年立歸りて、一萬は九つ箱王は七つにぞなりにける。或夕暮、箱王は母の膝の上に戯れながら、いかに母御前、父はいづくにおはしますぞや。其の佛は何國にましますぞや。行きて拜み奉らばや。母御前、いざさせたまへ。といひければ、遙かに忘れたる空も今更思ひ出されて消入るばかりなり。母泣くくゝのたまひけるは、あの曾我殿こそ己らが父にてあれ。と心強く語られけれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。箱王重ねて申しけるは、父御前はまことやらん狩場より歸りたまふ道にて工藤一藹とやらんに射られて死



工藤一藤  
左衛門尉祜經  
鎌倉殿  
源頼朝

此の里  
相模國足柄郡  
曾我莊

にたまひぬと兄御前は語らせたまふぞや。當時鎌倉殿の  
切り者にて鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ  
上る時もありとや。我らをも殺さんとや思ふらん。我等  
が此の里にあるを知らでや過ぐらん。など大人しく語れば、  
母より始めて女房たちまで皆袖をぞ絞りける。  
かくて夏も過ぎ、秋も闌け、九月十三夜の月、隈もなかりける  
に、兄弟二人庭に出でて遊びけるに、五つ連れたるかりがね  
の南をさして飛びゆくを見て、一萬申しけるは、あれ見たま  
へ、箱王殿。空に飛ぶ翼も別の翼ぞまじへぬ。五つあるは  
一つは父、一つは母、三つは子どもにぞあるらん。物いはぬ  
鳥類だにかくの如し。我ら人倫に生れながら、和殿は弟、我

は兄、母は實の母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬ  
こそ悲しけれ。我らが父をば河津殿と申してありきとか



(曾我兄弟飛雁を見る廣重筆我物語圖會)

や。父だにも世に  
おはしまさば、馬鞍  
をも賜はり、弓矢を  
も持ちて、今ぞ思ふ  
やうに物を射あり  
きなん。我々より  
幼き者も馬鞍、弓矢

を持ちて物を射ありく事の羨ましさよ。是等の事ども思  
ひ續くれば、いつよりも今宵は父御前の戀しく思ひ参らせ

らるゝぞや。とて袖に顔を差入れてさめくと泣きければ、  
弟も小賢しく顔を合せて泣居たり。一萬の乳母の女房こ  
れを聞きて、あなあさまし。人もこそきけ。いかに和上臈  
たち、夜も更けぬるに、さやうにおはするぞ、とくく入らせ  
たまへ。と恐しげにいひければ、二人のものは門外に逃げ出  
でて思ふやうに飽くまで泣きて後に内に入りにつけり。  
其の後は二人の者ども我が身の程を知りぬれば、世になき  
父を慕ひつゝ、語りあはするまではなけれども、唯目ばかり  
を見合せて互に袖をぞぬらしける。未だ十歳にも満たざ  
るに、あはれは深く思ひ知りけり。或時兄弟は竹の小弓、薄  
矧の小矢を取添へて遠侍に出でて遊びけるが、明障子のあ

りけるに二人立向ひ、あなたをなたに射通して、一萬箱王に  
申しけるは、我らもいつか成長して、和殿は十三、我が十五に  
だにもならば、如何ならん野山にてもあれ、親の敵祐經をか  
くの如く差合ひ、射取りたる後には、ともかくもなりなん。  
和殿も弓をよく射習ひたまへ、我も習はん。弓矢は男の一  
の能にてあるなるぞ。といひければ、弟も打領きけり。年ば  
へには恐しき事かなと人々思ひけり。(會我物語)

三 田園雜興

大町 桂月

われ年來病軀をいだけり。我が志を伸さんには、先づ我が  
體の健康を復せざるべからず。西郊の地空氣新鮮にして、

大町 桂月  
名は芳齋。  
文章家。  
明治二年生。

街上の塵埃到らず。乃ち居をこゝにトしぬ。一字の茅屋  
 前に葡萄棚あり、後に竹林あり。四顧たゞ木立を見て、人家  
 を見ず。環堵蕭然たり。嘗に我が心に適するのみならず、  
 亦我が體に適す。汽車の便をかりて都門よりかへり來れ  
 ば、滿園の綠樹笑つて我を迎ふ。稚兒飛び來りてわが手の  
 風呂敷包にぶらさがる。例として土産の菓子あらんこと  
 を期するなり。さるにてもわが志業未だ緒に就かざるに、  
 早くも三人の子の父となりぬるこそ恥かしけれ。  
 蒸暑き夏の夕涼み臺を無花果樹の下に移して一家晚餐に  
 團欒すれば、竹の葉戰ぎて涼氣自ら盤上に迸る。一盃の飯、  
 母と分ち、妻子と分ち、庭の雞と分ち、池の鯉と分つなり。今

一つ隣家に飼へる犬のいつも食時を違へず來りてかしこ  
 まるあり。その主人近ごろ妻子を残して病死せり。喪家  
 の狗の譬思ひ出されてあはれなるまゝに、残肴を投與ふる  
 を常とすれど、貧家の厨肴なきこと多し、馬鈴薯など與ふる  
 に、たゞ鼻先にかぎたるのみにて、悄然として立去ること氣  
 の毒なれ。  
 おぼつかなげに「とゝゝ」と呼びて雞に餌を與ふことも  
 亦小兒がなぐさみの一つなり。家の四方に散在せる雞、こ  
 の聲を聞きて喜んで集り來り、先を争うて食ふ。雄三羽雌  
 七羽ばかりあり、種類も一ならず。就中しやもの雌一羽最  
 も慄悍なり。餌を貪ること最も甚だしく、近よるものゝ頭

を嘴にてこづくさま、如何にもにくらしく、他の雞恐れて敢て近よらず。されど最も大にして好き卵を生むものはこのしやもなり。

われ平生物累なきことを期す。身には惜しきものを帶びず、家にも惜しきものを置かず、身邊の物品すべて用を辦ずるを以て足れりとす。一室の中粗末なる机と書物との外にはまた他の物なし。興來りて筆執り、書を繙き、興盡きて横臥し、煙を吹く。雞遠慮もなく座に上り來り、机上にたちて啼くことあり。護謨履はきて庭に遊べる小兒いつの間

にやら履のまゝにて座に上り來ることもあり。されど雞上らば追ふべきものと心得て、おのれは履にて上り居りながら、兩手をひろげて雞を追出すもいとあどけなし。その末の子はまだろくに口もきけぬばかりの年頃なり。母の乳にあけば、をりく我が机邊に來る。われ坐すれば兒も坐し、われ横になれば兒も横になり、われ書を開けば兒も書を開き、われ筆を執れば兒も筆を執る。あまり大人しきにふと心づきて見れば、折角我が書きたる原稿を塗抹して居ることもあり。かはいや幼兒、清正の猿と相距ること遠からず。

園中兒を喜ばしむるものは梅の實なり、葡萄なり、柿なり、栗なり、無花果なり、筍なり、雞なり、鯉なり、蟬なり、蜻蜒トコボリなり。此等に對して兒は喜ぶ。喜ぶ兒を見れば、たゞ嬉しきなり。

清正の猿  
加藤清正の愛  
養せし猿清正  
の讀みさした  
る論語に筆も  
て縦横塗抹せ  
り。清正見つ  
けて「汝も亦  
聖賢の道に志  
すか。」

慾もなし、名利の念もなし。自然に對すれば、始めはその愛すべきを覺え、終にはその敬すべきを覺ゆ。自然の奥には何等か神祕の潜めるもの、如し。而して小兒は人類の中に於て最も自然に近きなり。よしや子を持つて未だ親の恩は知らずとも、物のあはれは自ら知らるべくや。

樂しき我が家の團欒にも猶一點の愁雲たなびく。そは我が胃腸の病なり。母や齡古稀七十に近し。心配憂愁苦楚の中に數十年を送りて、我と相住むこと前後僅々十餘年に過ぎず。

近年我、膝下に侍して奉養することを得たるは一年中の小春日和の如きか。然るにわが病弱の身はその小春日和をさへ時雨雨の空に變ぜしめんとす。母は常に我が病身なる

親を思ふ  
親思ふ心にまさる親心、今日のおとづれ何とさくらん。吉田松陰 辭世の歌。

國木田獨歩  
名に哲夫、文學者。明治四十一年歿。年三十八。

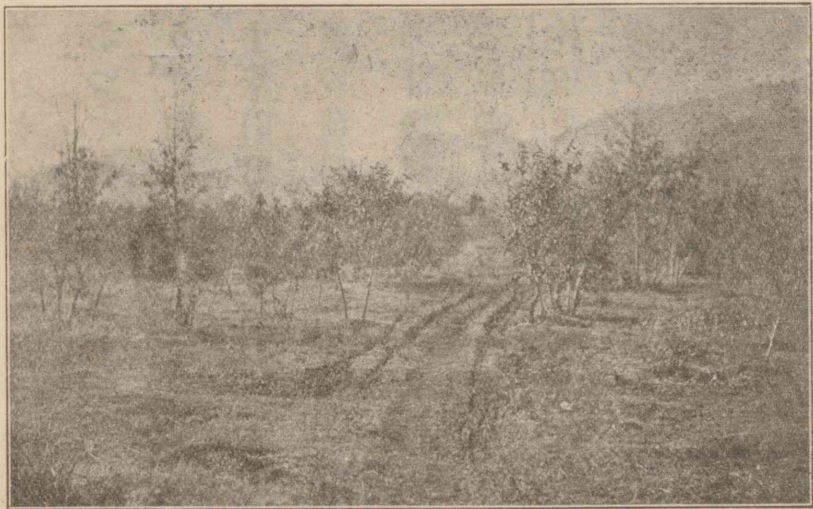
を氣遣ひ、わが食少なきを心配す。「親を思ふ心にまさる親心」と詠じけん、世に子の上げかり親の心をいたましむるものなし。罪ふかきかな、抑、不孝の子なるかな。昔廉頗、老いてなほ用ひられんとして強ひて健啖せりとかや。それは功名故、われは親故に強ひて餐飯を加へ、久しく絶ち居たりし晝食さへもものするに至りぬ。食進むやうになりて嬉しとて母の喜ぶさま見るにつけても、覺えず涙ぐまれしこと幾度ぞや。(春草秋草)

四 武藏野

國木田獨歩

武藏野に散歩する人は路に迷ふことを苦にしてはならぬ

い。どの路でも足の向く方へ行けば必ず其處に見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある。武藏野の美はたゞ其の縦横に通ずる數十條の路を當もなく歩くことに由つて始めて獲られる。春夏・秋・冬・朝・晝・夕・夜、月にも雪にも風にも霧にも霜にも雨にも時雨にも、たゞ此の路をぶら／＼歩いて、思ひつき次第に右し左すれば、隨處に吾等を満足させるものがある。これが實に武藏野第一の特色だらうと自分はしみじみ感じて居る。武藏野を除いて、日本に此の様な處が何處にあるか。林と野とが斯くもよく入亂れて、生活と自然とがこの様に密接して居る處が何處にあるか。武藏野にかゝる特殊の路のあるのは實に此の故である。



武 藏 野

されば君若し一の小徑を往き、忽ち三條に分れる處に出たなら、人に尋ねるに及ばない、君の杖を立て、其の倒れた方へ往きたまへ。或は其の路が君を小さな林に導く。林の中ごろに到つてまた二つに分れたら、小さな路を擇んで見たまへ。或は其の路が君を妙な處に導く。それは林の奥の古い墓地で、

苔むす墓が四つ五つ並んで、其の前に少しばかりの空地があつて、其の横の方に女郎花などの咲いて居ることもあらう、頭の上の梢で小鳥が鳴いて居たら君の幸福である。すぐ引返して左の路を進んで見たまへ。忽ち林が盡きて君の前に見渡し、の廣い野が開ける。足元から少しだらだら下りに成り、萱が一面に生え、尾花の末が日に光つて居る。萱原のさきが畠で、畠のさきに背の低い林が一叢繁り、其の林の上に遠い杉の小森が見え、地平線の上に淡々しい雲が集つて居て、雲の色にまがひさうな連山が其の間に少しづつ見える。十月小春の日の光がのどかに照り、小氣味よい風がそよ〜と吹く。

若し萱原の方へ下りてゆくと、今まで見えた廣い景色が悉く隠れてしまつて、小さな谷の底に出るだらう。思ひがけなく細長い池が萱原と林との間に隠れて居たのを発見する。水は青く澄んで、大空を横ぎる白雲の斷片を鮮かに映してゐる。水のほとりには枯蘆、少しばかり生えてゐる。此の池のほとりの小徑を暫く往くとまた二つに分れる。右に往けば林、左に往けば坂。君は必ず坂をのぼるだらう。武藏野を散歩するに、兎角高い處高い處と擇びたくなるのは、自然廣い眺望を求めようとするからではあるが、併し其の望は容易に達せられない。見おろす様な眺望は決して出て來ない。それは初めからあきらめた方がいい。





い。愈淋しい。落葉をふむ自分の足音ばかり高く、時々あ  
 わたゞしく飛去る山鳩の羽音に驚かされるばかり。  
 同じ路を引返すのは愚である。迷つた處が今の武藏野に  
 過ぎない。まさかに行暮れて困ることもあるまい。歸り  
 にも矢張凡その方角をきめて、別な略をあてもなく歩くが  
 よい。さうすると思はず落日の美を見ることがある。日  
 は富士の背に落ちんとして未だ全く落ちず、富士の中腹に  
 群がる雲は黄金色に染つて、見るがうちに様々の形に變ず  
 る。連山の頂は白銀の鎖の様な雪が次第に遠く北に走つ  
 て、終には暗澹たる雲のうちに没してしまふ。  
 日が落ちる。野には風が強く吹く。林は鳴る。武藏野は

山は暮れて  
 與謝蕪村の  
 句。

暮れんとする。寒さが身に沁みる。其の時は路をいそぎ  
 たまへ。顧みて思はず新月が枯木の梢の横に寒い光を放  
 つてゐるのを見る。風が今にも梢から月を吹落しさうで  
 ある。突然また野に出る。君は其の時、

山は暮れて野は黄昏の薄かな。

の名句を思ひだすだらう。(武藏野)

五 高空飛行 その一

高空飛行ほど飛行家自身の慾望を咬るものはない。五百  
 尺から千尺、千尺から一萬尺と矢鱈に高い空に昇つて見た  
 くなる。是は人間固有の好奇心である。さう高く昇るこ

とが飛行機の實用的價値の上から觀て、素より大した必要な事でもあるまいが、飛行機で無ければ決して行かれぬ高い空へ、寒氣や酸素の不足と闘ひながら命がけて昇つて行く、其處に飛行家獨得の快味も野心もある。さうして昇り得た飛行機の高さは今日までに二萬五千尺を越えて居る。殆ど富士山の高さの二倍餘まで到達した。

空氣よりも重い飛行機で空氣の次第に稀薄になる高い空へ昇り行くことは決して机の上で考へるやうな樂なものではない。もう其處には鳥類も棲息しない。眞の孤獨寂寥はかゝる高空飛行の時に感ずるのであるが、人生未知の境界、空中の神祕に憧れる飛行家にとつては、又これほど愉

快な事はないのである。

蟬時雨の喧しく人は炎暑に苦しむ時、空の一方に叢り立つ雲の彼方を微かなるエンジンの音立て、飛び行く飛行機の快げなるに、何人か羨望の念を起さずに居られよう。人は皆その雲に憧れ、詩人は其の大自然を歌はんとして居る。されば飛行機よ、爾の生命はその高い空にあるのである。ジョージ・ジャベールは南米ペルー國に生れ、佛國に渡つて飛行家となり、明治四十三年秋九月當時佛國の名飛行家モラーヌの作つた高度レコードを破つて八千四百八十五呎の高空に昇り、其の後十數日、飛行家として最初の試なるアルプス越を敢行し、遂にそこに犠牲となつた。年僅に二十歳。

彼は出發に際して親友ピエロブシクに向つて、予にして若し飛行に失敗せば、君必ず予に代つて雪辱飛行を行へ」といつたといふ。見上ぐれば彼の越ゆべきアルプスの絶頂シムプロンの峰は實に海拔六千六百呎、途中で發動機に故障が起つたからとて着陸すべき地點などは一つもない。高度を次第に高めて、蓋世の英傑ナポレオンが開いた山道を目標として遂に七千六百呎の高空に上り、易々とシムプロンを越え、伊太利に入つて山麓ドモドゾラ着陸の際、地上僅か三十呎の低空で、翼が折れ、眞逆様に墜落して重傷を負ひ、病院に苦悶すること數日、遂に異郷に不歸の客となつた。ドモドゾラの村民は此の勇壯なる青年の死を悼んで老も

若きも涙ながらに葬儀を營み、其の柩には生前彼が高空憧憬の記念にシムプロンの峰の草花を飾つたといふ。

シャベールのこのアルプス越は單に山上突破といふ意味でなく、高空飛行の導火線となつて、これから高空飛行熱は一時歐洲飛行界を風靡し、高度の記録が後から後からと作られた。明治四十五年七月に開催されたライブチッヒ飛行會で獨逸の飛行家ヒルツは、往復二百哩の飛行をなし、その高度は一萬二千三百呎、既に富士山の高さを越して居た。その年の秋九月には佛人ローラン・ギャルロッスが一萬六千四百呎の記録を作つた。

ギャルロッスは此の時特に高空飛行に適當するブレリオ

單葉を製作し、八十馬力發動機を装置し、酸素吸入器を携へ、九月六日の正午少し過ぎに海岸近くの飛行場を出發した。三千三百呎に昇つた時に漸く眼界を遮る雲の上に昇り、海も陸も殆ど差別がつかなくなつた。彼は益々勇往邁進して六千呎八千呎より一萬三千呎に到達してから漸く酸素の吸入を始めたが、其の頃からは上昇が次第に困難になつて更に二千餘呎を加へた時には、發動機の音さへ少し妙になつて來て、時々飛行機が空中で滑るやうな氣がした。どうかして更に數百呎を加へてから降りようと思つたが、其の時携帯した酸素も全く缺乏して居たのに氣がついて、其の儘急いで下降を始めた。眼界殆ど一物をも見ず、暗澹たる

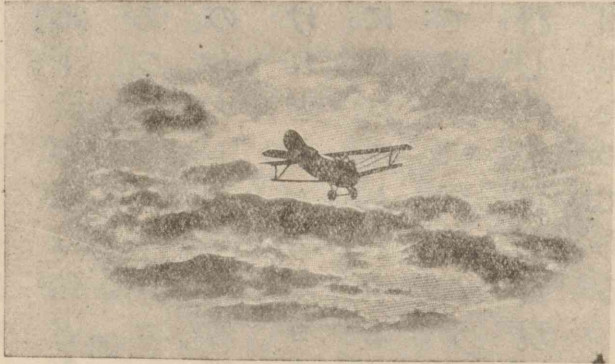
空中に發動機も全く停止し、さながらの無音境を夢の如くに空中滑走で降りて來た。地上から五千呎になつて漸く雲層の下に出て、地面を俯瞰する事が出來た。この飛行約一時間であつたといふから、一分間の上昇力は約二百七十呎といふすばらしいものであつた。

### 高空飛行 その二

ギャルロックスが一萬六千四百呎といふ世界の高度レコードを作り、ほつと一息する間もなく、僅か一週間にして再び此の記録を破る大飛行家があらはれた。ジョージルガニ  
ー其の人である。彼が將に出發せんとする時、あなたは

一體何米上り得る積りか。といつて、衆人は多く彼の無謀を嘲つて居つたが、ルガニヨルガニヨは昂然（意を上げ）として「二萬呎」と言ひ放つた。人々相見て其の大膽なのに驚いたのであつた。斯くして九月十三日午前十一時五十五分を以てルガニヨは巴里郊外イッシー・レ・ムリノー飛行場を出發し、此處から約九哩を隔てたヴィラックブレール飛行場に向つて直進し、瞬く間に一萬呎にのぼり、更に一萬六千呎に昇つて始めて酸素の吸入を始め、一萬八千六百三十五呎、豫定に達せざること僅に一千三百餘呎であつた。出發から着陸まで一時十分。

百呎をすべし 覇氣縱横のギャルロックス何條以て黙すべきその年十二月



飛行機 (用送驅式トルボ-ユニ)

を以て彼はルガニヨの記録を打破して遂に一萬九千呎に上つた。斯うしたギャルロックスの飛行は世界の最高レコードとして暫く持續された。が翌大正二年三月に至つてこの記録も又もや佛國の新式飛行家エドモンド・ベレーオンに破られた。ベレーオンは特に一人乗百馬力ブレリオを新造して、三月三十一日午前十一時二十五分ビュック飛行場を出發し、一時七分間を費して再びビュック飛行場に着陸

した。その高度計の示す所は實に一萬九千六百八十五呎であつた。彼は始め、四千米に達した時に酸素の吸入を始め、下降の際は殆ど全部を空中滑走によつて着陸したのであつた。ギャルロックスルガニョーの兩雄も今や全く新進のベレーヨンに名聲を掠奪された感があつた。

けれどもルガニョーもさる者、同年十二月二十七日歳の將に暮れなんとするに當つて、又々ベレーヨンの記録を破つて克く二萬百八十呎の高度に達した。かくて彼は嘗て傲語した抱負を實現し、飛行機を以て二萬呎を越えることが出來たのである。

二萬呎といふ高度は決して容易なものではない。斯うな

ると飛行機は果して何處まで上昇し得るものかといふ問題に逢着して來る。飛行家の野心は益々昂進し、人の好奇心は次第に唆られ、もう大抵にして此の記録を破るものはあるまいと思はれたが、翌三年七月十四日になつて又々此の記録を破り去る快飛行家が現はれた。それは獨逸のオエレリッヒといふ人で、高度實に二萬六千二百呎である。言ふまでもなく是が今日に於ける高度の世界的レコードである。

當時に於ける獨逸人の努力は嘗に高度記録のみでなく各種の研究に於て漸く佛國人を凌駕せんとする形勢を示して居つた。此のオエレリッヒの華々しい高度レコードが

發表されてから、一箇月を経ずして、茲に歐洲大戰亂が勃發し、飛行機も専ら軍事的方面の使用に忙殺され、各種のレコードも戦争勃發以前を以て自然一時期を劃する事になつたのである。(所澤よりに據る)

### 七 戰場電話

一九一四年十一月二十六日から二十七日の朝にかけて、今までランス附近に陣を布いて居た獨逸重砲兵の一隊は、何處へか其の姿を隠してしまつた。佛軍は盛に飛行機を縦つてみたが、容易に發見することが出来ない。色々と研究した末、小丘上にある一農家に偵察兵を派して、敵軍を搜索

ランス  
佛國の東北部  
にある一小  
市。巴里の北  
四十里ほど、  
白耳義の國境  
に近し。

しようとは決したが、此の任務に就くものは、萬死の覺悟をしなければならなかつた。遂に幾人か志願して出た決死の兵士の中から、二名の曹長を派遣することゝなつた。二人の曹長は林間を這ひ、或は敵彈に身を暴して、千辛萬苦の末、遂に無事に目的の農家に忍び込むことが出来た。と見え、數分時経つてから、曹長の電話がかゝつて來た。

「もしく、え、電線が無事に引込みました。はい、二人は今納屋の中に潜んで居ります。獨兵は目前に居るのであります。此の農家の北、千五百米、地圖上に示してある小林を目標に照準して下さい。」

味方の巨砲は轟然と轟いた。

「隊長殿、前面に落下。照準は猶百米前方、少し右方に過ぐ。左方照準。然り、其の邊。命中。命中。的確であります。」

殿々轟々

佛軍の打出す砲彈に敵兵は算を亂して僵れた。

「もしく、敵は非常に混亂して居ります。はい、私どもは納屋の中に隠れて居るので、至極安全です。此の家の納屋の明り窓は敵軍の方に向つてあいて居りますから、偵察には非常に便利であります。」

十分ばかりの間に、佛軍は敵の砲兵を殆ど撃碎してしまつた。すると不意にけたましく電話がかゝつて來た。

「隊長殿、砲撃中止。敵は山林から退却を開始し、我が農家

の方向に向つて移動して居ります。え農家、私どもが居る此の家の方へであります。併し、併し、私どもが退却してしまひますと、今後の報告は如何致しませう。はい、いや、今しばらく留つて形勢を見たいと思ひます。納屋の中に居りますから、敵兵に発見されることはありません。敵は今此處から三十米の處に砲列を布いて居ります。え、出發、撤退するんですか。嗚呼もう遅くあります。獨兵は庭の中へ入つて來ました。なに構ひませぬ。敵は全部用意を整へて陣を布きました。隊長殿、今であります。砲撃開始。目標は此の農家。いえ私どもを目標にして砲撃して下さい。一分の猶豫もありません。早く。



目標はこの農家であります。」

嗚呼勇敢な兵士。隊長の身として斯様な忠勇な部下を如何して己の砲彈で殺すに忍びよう。併し二人の兵士は殺しても國家は救はねばならぬ。好し、二人の讐は打つて遣るとばかりに、號令一下。戦友の死を弔ふ涙は砲彈の雨。忽ち農家の礎も敵軍の砲車も激烈な佛軍の彈丸に碎け散つて、さしもの敵を見事に全滅させてしまつた。嗚呼勇敢な兵士。其の電話の聲は今尙戦友の耳に残つて居るけれども、其の曹長も其の農家も己に影をも留めずなつてしまつた。(時局に關する教育資料)

井上馨

政治家。  
前大藏大臣。  
侯爵。  
大正五年薨す  
年七十。

八 伊藤公ヲ誄死後生前善行を述べる 井上馨

明治四十二年十月二十六日、我が友樞密院議長伊藤博文公、  
韓國兇徒ニ狙撃セラレ、暴カニ清國吉林省哈爾賓驛ニ薨ズ。  
嗚呼哀シイカナ。予何ゾ多言スルニ忍ビシ。自ハタカレトシテ然リト雖モ  
予君ト交ル五十餘年、異體同心、生死苦樂ヲ共ニシ、國歩艱難  
ノ秋ニ始リ、太平富貴ノ日ニ至リ、終始渝ルコト莫シ。自ラ  
謂フ、交友ノ誼今古ニ愧ヅル無シ。予遂ニ復一言セズシ  
テ止ム可カラズ。予君ニ長ズルコト六年、君予ノ垂死ヲ哭  
スルコト二回、予幸ニ君ノ交情看護ニ因ツテ再生スルヲ得  
タリ。料ラザリキ、今日反ツテ君ノ葬ヲ送ラントハ、嗚呼  
哀シイカナ。

八 伊藤公ヲ誄

文久癸亥  
文久三年

回憶スレバ四十七年前、文久癸亥ノ仲夏、君予ト偕ニ發憤シテ海軍ノ術ヲ學バント欲シ、禁ヲ犯シ、潜カニ泰西ニ航シ、居ルコト纔ニ半年餘、馬關鹿兒島ノ攘夷ヲ聞キ、意ヲ決シテ急

筆蹟

鶴車衝レ雨出ニ  
離宮。滿道臣  
民仰。德風。寶  
祚之隆天祖勳  
千秋紹述即無  
窮。  
侯爵伊藤博文

常車衝雨出離宮滿道臣民仰  
海風寶祚之隆天祖勳千秋紹述即無窮  
侯爵伊藤博文

伊藤博文筆蹟

高杉  
晉作。勤王家。  
萩藩士。

ニ還リ、首トシテ開國ヲ倡ヘ、故國ヲ危難ヨリ脱セシム。内訌尋イデ起リ予ハ暗夜要撃ニ遭ウテ殆ト死シ、君ハ高杉ヲ助ケテ兵ヲ舉ゲ、藩論ヲ回復シ我ガ一大危機ヲ轉過セリ。

已ニシテ、王政復古、乃チ徵士ニ舉ゲラレ、版籍奉還ノ際、君、木戸・大久保二公ヲ佐ケテ尤モ力アリ。維新ノ績此ヨリシテ破竹ノ如シ。進取ノ宏謀ヲ翼賛シ維新ノ大業ヲ成就ス。



伊藤博文

勅ヲ奉ジテ憲法ヲ創定シ長ク國家ノ本ヲ固クシ、其ノ他、法律・制度ノ設、概ネ君ニ俟タザル莫ク、洵ニ組織ノオヲ推ス。四タビ總理大臣トナリ、

勳業ノ盛ヲ極メ、首メニ韓國統監トナリテ保護ノ範ヲ立ツ。君學漢洋ヲ該ネ、識東西ニ通ズ。尤モ東洋ノ平和ヲ以テ念ト爲シ、常ニ忠節道義ヲ以テ淬礪シ、王臣匪躬ヲ以テ自ラ任

王臣匪躬  
王臣寒々匪躬之故。易經。

ズ。故ニ國民ハ仰イデ文治ノ宗ト爲シ、外人ハ目シテ平和ノ表ト爲ス。留韓四年、歸來未ダ曾テ寧處セズ。年七十二垂ントシテ、一歳ノ行萬哩ヲ期シ、節冬寒ニ向ヒ、北滿ノ野ニ見學ス。盡忠報國ノ至情ニ出ヅルニ非ズンバ、孰カ能ク此ノ如クナラン。豈謂ハンヤ、君ノ忠節ニシテ、茲ノ不測ニ遭ヒ、暴カニ異邦ノ地ニ薨ゼントハ。嗚呼哀シイカナ。君ノ訃電聞ス、皇上震悼、勅シテ國葬ヲ行ハシメ、**白叟黃童**織婦耕夫モ哀悼セザル莫ク、乃チ外國帝王・大統領・大臣・紳士ニ至ルマデ親シク弔電ヲ發シ、我が不幸ヲ言ハザル莫ク、内外ノ新聞争ウテ君ノ才德勳業ヲ稱賛ス。**輿望**ノ盛振古未ダ君ニ比スベキ者アラザルナリ。抑、予ハマタ之ニ因リテ

古人  
宋の蘇東坡。

本多重次  
徳川氏の世  
臣、勇猛にし  
て剛直。世に  
鬼作左とい  
ふ。  
文祿五年(三三  
八)歿す年六十

新井白石  
名は君美  
漢學者。  
政治家。  
享保十年(三六  
九)卒す年六十

吾ガ國民ニ望ムコトアリ。誠ニ君ノ死ヲ哀シマバ、則チ宜シク舉國一致、盡忠報國、東洋ノ平和ヲ維持スルニ務メ、以テ君ノ志ヲ紹グベシ。古人云フ、**匪以報公、維以報君、死者復生、信我此言。**庶ハクハ君ヲシテ瞑セシムルヲ得ン。嗚呼哀シイカナ。

九 本多重次

新井白石

天正十三年、徳川殿御脊中に疔といふもの出來て既に危く見えさせ給ひしかば、内外の醫療術を盡しけれども、その驗なく、唯弱りに弱らせ給ひ、自らもこれまでと思召しけるにや、宗徒の御家人等召集めて御跡の事ども仰せ置かる。人

人の周章いふに及ばず、士民百姓等に至るまで、その程々に従ひて祈らぬ神佛もなく、立てぬ願もなし。重次御枕に取りつきて泣くく、申しけるは、殿も定めて覚えさせ給ひな、重次が昔此の病を受けしに、たちどころに驗を得し良醫の候。彼を召して見せ試み給ふべし。と申す。「諸醫既に手を束ね家康亦死を決す。この上醫療其の詮なし。且は命を惜むに似たり。とて用ひ給はず。

重次大いに怒つて、斯程大事の腫物軽々しく思召し侮つて、事急なるに臨めばこそ諸醫も術盡きぬれ。それに又良醫して治し參らせんとするをも用ひ給はず、失せたまはんと、御心がらとは言ひながらあつたらしき命かな。諸醫術

盡きぬと申す上は、彼争でか治し參らすべき。年老いたる重次が御跡にさがつての御供叶ふべからず。さらば御先へ參らん。とて、御前を罷立つ。

徳川殿大いに驚かせ給ひ、あれ止めよ。と仰せければ、近く侍ふ人々走り出で引留め、仰せらるべき旨あらせられ候。といふ。重次大いに聲を怒らかして、最期の暇乞うて罷り申す者を見、苦しい殿ばらの止めやうや。と罵つて出でんとす。「されば候。その人を止めよとの御使が、えこそ止めねと申せとは、おとなしくも候はぬ本多殿。といはれて、げにさも候とて御前にまゐる。

徳川殿、汝は物に狂ひてかくはいふか。家康未だ死し果て

筆蹟

爲新曆之御賀  
預賞給添故拜  
見候御風福御  
履新之事珍重  
令存候拙者事  
無恙迎歲仕候  
沙而去冬者御  
精選之一册御  
芳惠不知所謝  
前書に續々呈  
謝之事候定而  
其書可達几下  
奉存候猶明永  
日萬慶可申仰  
候恐惶謹言  
新井勘解由  
尹美  
正月廿五日  
稻若水様  
貴報

ぬに縦ひ家康が命を終るとも、  
汝が世に在らんを頼にこそ死  
すべけれ。又汝等も如何にも  
して一日も世に残りて、若き者  
ども掟して、我が家の絶えざら  
んやうを計らんとは思はずし  
て、詮なき死の供せんとする事  
やある。と仰せければ、いや、  
それは人によりての事に候。  
重次も今少し年だに若く候は  
んには、仰までも候はず、犬死せ

(簡手家名) 新井白石筆蹟

御聲  
去年家康の女  
實子北條氏直  
に嫁す。

ん人の御供、其の詮なし。重次、若年の昔より此處彼處の軍  
に従ひて、眼射られ、指落され、足切られて、負はぬ手も候はず。  
人のかたはといふ程のかたは、重次が身一つに餘つて、世  
に交らんこと叶ふべき身ならず。殿の御情深ければこそ  
當家にては人に畏れられも敬はれもしつれ。殿の亡くな  
らせ給ひなば、他人までも候まじ、まづ御聲の北條殿我が國  
國を取らんとし給はん、若き人々が行末久しう仕へんと  
頼みきつたる主に忽ち別れて氣後れしは、かゝしき矢の  
一筋をも射出すこと叶ふべからず。當家滅されんこと、亦  
踵を回らすべからず。重次それまで存へて、あの年よつた  
るかたはものは、徳川殿の譜代にて、何がしといはれし家人

九 本多重次

四六

武田勝頼

なるが、いかに惜しき命なればかく世に恥をさらすらん。と後指さ、れん事老の恥何事かこれに過ぎ候べき。此の頃までも武田の家の人々御當家へ召されて、さらぬ人にも手をさげ腰を屈めしを世にもあはれに思ひしが、今は此の老人めが身の上になつて候と存ずれば、殿におくれ參らせんが悲しきばかりにも候はず、我が身の果もあさましきによつて、御先に死することにて候。と申す。

「汝が言ふ所、ことわり至極せり。さらば醫療の事は汝が心に任すべし。天命既に至りて、家康空しくならんとも、汝も亦家康が心に任せ、いかなる恥を見つべくとも、一日も生殘つて、後の事よきに計らふべしと存ずるや否や。」と仰せけれ

ば、重次が申す旨に任せられんには、重次いかで又仰をや背くべき。と申す。「さらば醫師召させよ。」とて召さる。

醫師やがて參つて、「御灸治宜しかるべし。」と申せば、重次艾取つて据う。御灸の痛覚えさせ給はねば、艾を増加ふること多くして後、聊か痛ませ給ふ由、仰せければ、御藥をつけて參らせ、御藥湯をも進め奉りしに、その夜半ばに、御腫物潰れて、膿水・血、夥しう流れ出で、御惱たちどころに輕ませたまへば、重次は嬉泣に聲を限に泣く。御前伺候の人々も感涙を共に流しけり。(藩翰譜)

一〇 利根川の秋曉

徳富健次郎

息栖

常陸國鹿島郡  
中島村大字息  
栖

北浦

常陸國霞浦の  
東にある湖、  
其の水、浪逆  
浦より利根川  
に通ず。

小見川

下總國香取郡  
小見川町。

チエルシー

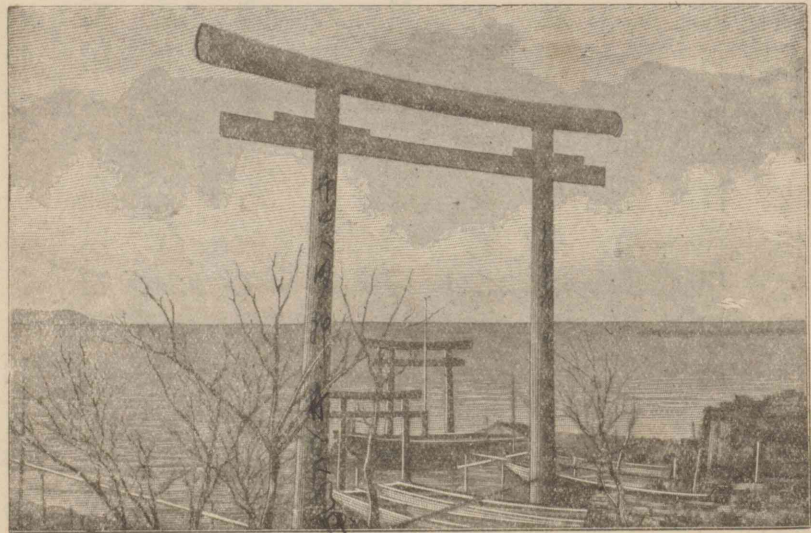
英國倫敦市の  
近郊。評論家  
歴史家カーラ  
イン (1793-  
1881) のマニ  
住み。

コンコルド

北米合衆國東  
部の市。評論  
家、詩人エマ  
ーン (1803-  
1893) のマニ  
住み。

先年の秋十一月の初旬ごろ、利根川の左岸の息栖と云ふ處に泊つた。此處は利根川の本流が北浦の末流と落合ふ處で、川幅が濶く、對岸の小見川までは小一里もあらう。宿はすぐ水邊で、夜半に眼をさますと、櫓の音がぎいくと枕頭に聞える。翌日、黎明夜明けに起きた。宿の者はまだ寢て居るので、そつと戸を明けて河邊に出ると、其處に薪が積んである。霜を拂つて腰をかけた。天地はまだほの暗い。空も河面も茫として鉛色であつた。裏の方の暗い小屋の中で、雞が勇ましく曉を告げると、餘程たつて、川むかふの小見川の方から、いかにも微かな雞の聲が聞えた。大河を隔て、呼びかはす此の雞聲は實によい。チエルシーの賢とコンコルドの哲とは實にかくの如く大西洋を隔て、呼び交したのであらう。自分の眼には曉は此の兩岸の雞聲の間から川面に涌きあがつて來る様に思はれた。暫くすると、小見川の方の空がぼうつと薔薇色になつて來た。と見ると、川面も薄紅を流して、ほやり〜水蒸氣が見えて來た。

息栖神社



息 栖 神 社

實に迅い。瞬をする間もないのである。夜は川下の方へ流れて、曙の光は四邊に満ちて居る。雞はなほ鳴きつゞけてゐる。空と水との薔薇色が少しうつろふ。忽ちきらきらとまばゆき光が水にうつる。ふり返つて見ると、朝日は杲々として今息栖の宮の森の梢を離れたのである。その梢を離れる鳥が一羽、朝日を負うて、さながつ曉を告げわたる神使の如く、凜とした朝の大氣に羽を搏つて、小見川の方へ飛んで行く。小見川はまだ蒼々とした朝霧の中に眠つて居る。

對岸はまだ眠つて居るが、こちらの村は最早覺めた。背後の茅舎から煙が立上る。今棚を出た家鴨は足跡を霜につ

けて、くわつくと呼びながら、朝日を碎いて水に飛込む。水楊の枝に小鳥が囀る。今起きて來た村人が白い息を吹き吹き川に下りて河水を掬んで口を漱ぎ、顔を洗ひ、それから遙かに筑波の方へ向いて、掌を合せて拜んで居る。「あゝ、實に好い拜殿である。」と自分は思つた。(自然と人生)

一一 やつかほ

黒田清綱

やつらの子孫はたれもたれもあつた  
門田れ小萩をたれもたれもあつた

黒田清綱  
歌人。  
樞密顧問官。  
子爵。  
大正五年薨  
す、年八十七。





ワイマール  
獨逸ワイマール大公國の首都。

瀧の川  
東京市の北郊王子町にある細流。

シルレル  
獨逸の詩人。  
(1753-1805)

ゲーテ  
獨逸の詩人。  
(1749-1832)

地よき處に候。老樹蔭鬱たる公園の中をイルムと云ふ瀧の川位の流ちよろゝ致居、其の上には鐵の欄干に石柱と云ふ嚴しき橋も有れど、又丸太を組合せて架けたる風流の橋もありて、シルレルの腰掛とか、ゲーテの休息小屋とか、何れも昔通り保存せられて、古を偲ぶ跡到る處に散在致居候。一々委しく點檢して詩作との關係など取調べ候は、餘程興味ある事ならんが、短日月の滞在にては夫も出來兼候まゝ、通り一遍の旅客として、目に觸れ候處を御報申上候。

今日第一番に足を運びたるは圖書館に候。此の圖書館は初めはゲーテが我が書齋にとて自ら設計したる



ゲテ大理想石像

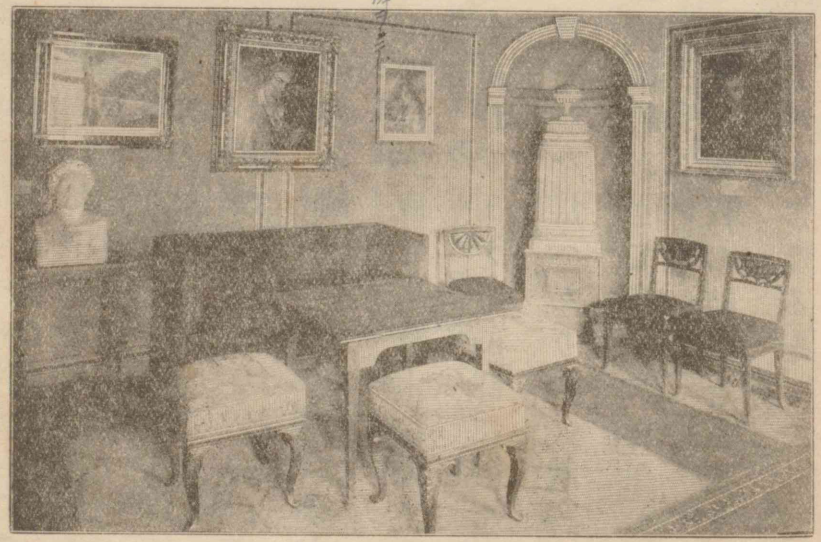
建築の由。珍書奇籍も夥しく、ゲーテ・シルレルを始め有名なる人物の彫像、肖像畫など貴重品の數々ありて、今迄文學史の挿畫にて纔に其の佛を偲びたる名作の實物に接し、トリッベルが靈腕に彫まれたる、アポロ其の儘との評あるゲーテが大理石像、ダンネツケルが妙技を揮ひしシルレルの

トリッベル  
獨逸の彫刻家。

アポロ  
希臘羅馬の神  
話に光の神、  
日の神。  
ダンネツケ  
ル  
獨逸の彫刻家。  
(1759—1841)

半身像など、ちつと見惚れて案内者に急ぎ立てられ、不承不承歩を移すと云ふ始末、儘になるならば何時迄も此處に居て、朝夕に眺め暮したしとの念も起り候。圖書館を出でてシルレルの住宅を音づれ候。表の見附きはさして立派と云ふ建物には無之候へども、窓の板戸が綠色に塗立てある様など、何となくゆかしき心地せられ候。中に入りて一階二階は梯子段を上りしのみ、三階に至りて應接室・書齋・臨終室を一覽致候。一切の裝飾品を取除けて、詩聖が使ひ慣れし文房具・椅子・寢臺・掛額等を据附けあるばかりなれば、至つて質素に候へども、此の内に起臥して晩年の傑作を産み出し、

ことかと思へば感慨  
限なく、腐れ林檎の香  
を嗅ぎて深更まで意  
匠を凝したるは此の  
机の前にやあらん、嗅  
煙草に睡魔を驅りて  
神來の筆を馳せたる  
は彼の窓の下ならん  
など、詩人ならぬ我が  
身も空想の天地に馳  
往きて、案内者の饒舌



シルレルの書齋

も耳に入らず候。臨終室を見るに及びて其の餘りに  
狹隘なるに驚き、かゝる偉人が此のむさくろしき部屋  
にて息を引取りたるかと、坐ろに暗涙に咽び候。  
此處を立出で、國君の墳墓に詣で候。これはワイマー  
ル代々の君主が遺骸を納むる圓天井の石室にて、ゲー  
テ・シルレルの棺も此の裡に安置せられ、木棺の上部は  
月桂樹の葉にて堆く蔽はれ、ゲーテの頭部には金製、シ  
ルレルのには銀製の月桂冠を供へあり候。兩詩人の  
優劣は存命中より兎角議論ありて、ゲーテ自身も強ひ  
て一人に團扇（扇）を上げずとも、是程の詩人を二人まで出  
したりと獨逸國民は喜ぶ可き筈なるを、と云ひたる位

なるが、今此の金銀の差別を見て、勿論兩詩人の地位若  
しくは逝去當時の事情に依るとはいへ、シルレルは死  
後まで薄倖（不幸）なりきとの感を起し候。併し身を布衣（貧者）に  
起して、王者と共に同一石室に葬らるゝは比類なき名  
譽とも申すべきか。感歎の餘り、兩詩聖の棺の上なる  
月桂樹の葉數葉を摘取り、記念にとて持歸り候。  
これよりゲーテの住宅に赴きしが、流石宰相の地位に  
ありて當代（其時代）に時めきし詩人の事とて、シルレルの居宅  
などとは比較にならぬ程廣大なるものなれど、現今の  
程度より云へば、極めて質樸（質樸）にて、是又案外の感に打た  
れ候。ゲーテの寢室に入りて、シルレルが臨終の際ゲ

イエナ  
獨逸ワイマール大公國の市。  
ウルツブルグ  
獨逸ハヴアリア王國の都府。

芳賀矢一  
國文學者。  
文學博士。  
東京帝國大學文科大學教授。  
慶應三年生。

一テも病蓐に就き居りしかば家人はシルレルの死を告げなば病氣に障りなんとて秘しけれど、素振りに悟りて、其の實を察し、<sup>イメ、サメト、涙、流、ラ、シ、ル、シ、レ、イ、タ、</sup>潸然流涕したりとの一事を思ひ浮ぶれば、兩詩聖の交情は東西古今に例なく美しきものなりけりと感涙禁め難く候ひき。  
ワイマール見物も一通り相濟みたれば、明日此の地を發足致し、イエナを経てウルツブルグに赴くつもり。行く先々の模様は追々御通知可申上候。(帝國文學)

一三 山室と鈴屋

芳賀 矢一

松・杉・椎などで小暗い路を四五町も上つた處に浄土宗の寺

妙樂寺

伊勢國飯南郡花岡村大字山室にあり。松坂町の西南一里餘。

本居翁

宣長。  
享和元年(興一)歿す年七十二。

平田篤胤

天保十四年(三三)歿す年六十八。

がある。妙樂寺といつて、本居翁には深い關係のある寺である。それから右へ左への九十九折を喘ぎく、六七町も上ると、古い木の鳥居が有つて十數段の石磴の上二三十坪位が平地になつて居る。其の中央の小高い土盛が即ち翁の墓である。上に櫻の樹が一本。「本居宣長奥墓」と題した墓石がある。翁の墓の左手には、平田篤胤大人のなきがらはいづくの土になりぬとも、  
<sup>本居宣長ノ所ニ行キタリモシヤン</sup>魂はおきなのもとに行かなん。

といふ歌を鐫りつけた丸い石が建て、ある。篤胤大人は翁の歿後の門人で、生前に教を受けられたことは無い、而も數多の門弟子の中で獨り翁の傍に侍つて居られるのは、大

人にとつては嘸かし満足の事であらうと思ふ。此の墓所は彼の妙樂寺の所有地であつたのを翁が懇請して生前に選定して置かれたのである。其の承諾を喜んで、住僧に贈られた手紙は今尚同寺に珍藏して居る。

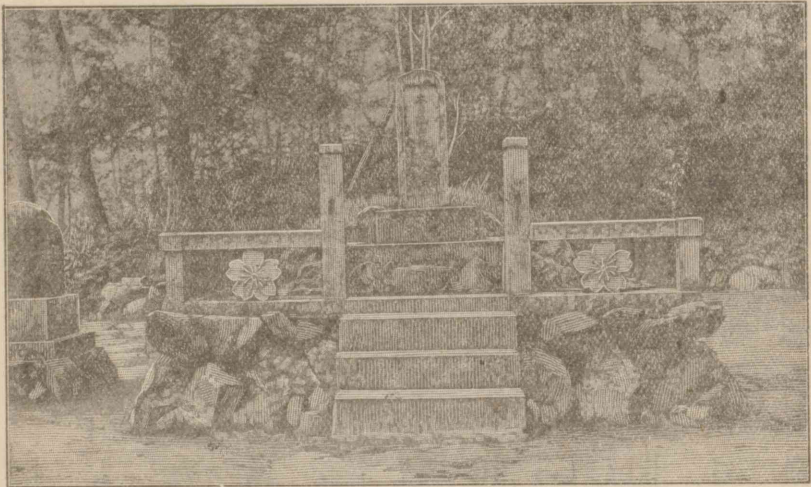
山室に千年の春の宿しめて、

風知られぬ花をこそ見ぬ。見テ榮レモ

と詠まれたのは此の時である。二十年來一日として翁の書物を読まぬ事の無い後進の一書生が今始めて翁の墓前に額づいたのだから、感慨は眞に無量であつた。

百年の世は隔つれど、教へ子に

數まへませとをがみ額づく。



本居宣長墓

翁が歿後の門人は幾百萬の多きに上つて居るのであらう、其の著書の卓絶な學術上の價值と偉大な感化力とは未來永劫に歿後の門人を作りつゝあるのである。世に學者の事業程大なるものは無い。

此の墓所は山の頂にあるので、眺望の美しさは比類が無い。青々とした伊勢の海を

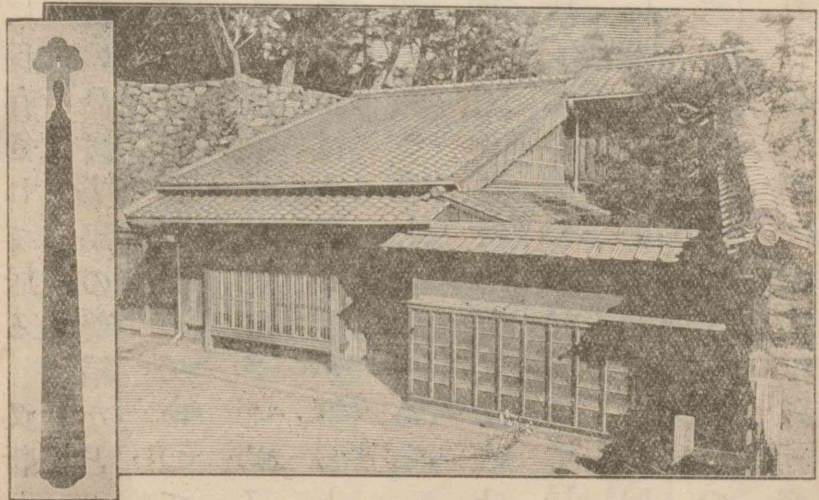
見はるかして、志摩・三河・尾張等の崎々山々、近くは松坂町を眼下に見る。「富士の山もいつもは丁度ああたりに見える」と案内の男は指さした。千古に卓越した學者の奥城として、誠にふさはしい場所である。

奥墓

妙樂寺に入つて一憩し、翁の書幅を拜し、參拜名簿に記入をとする。此處の眺望も誠に美しい。元來本居家の檀那寺で、翁も折々此處に來られた事がある。今日は住僧が不在で、寺男が一人留守居をして居たが、いざ歸らうとすると、その男も居ない。車夫に聞けば、在り今在所まで行つて來るといつて出掛けたといふ。さながらに太古の民である。松坂へ歸つて、城跡の公園に行く。こゝに鈴屋遺蹟保存會

があつて、翁の舊宅が其の儘に保存されて居る。又新しい倉庫には翁の自筆の草稿、遺愛の品、醫業用の藥箱なども陳列されて居る。どの稿本も丁寧に綺麗に認めてあつて、翁が四十餘年の勤勉篤學人をして大いゆゑに、これに於て、熱心ナルヲ覺えず襟を正さしめる。舊宅はもと魚町にあつたのを、市中は火災の虞があるといふので、保存會でこの舊城址の一角へ移したのである。併し庭の樹木置石まで一切舊態を存するやう苦心したといふことで、臺所の竈も井も便所も本の儘の形に残つて居る。下が引出になつて居る小さい楷子段を上ると、二階が四疊半の書齋、その床の柱に三十六の鈴が六つづゝ六段につながれて懸つて居る。尤もこれは模造品で、本品は陳列庫に

在る。さてもこの書齋こそ翁が一切の著述の製作せられた場所で、此の四疊半から日本全國を吹靡かす風が舞起つたのである。西向の窓からさし込む夕日は、無堪へ難かつたらうと思はれて、此の質素な家居の様が愈、翁の人格を大ならしめる。獨逸のワイマールでゲーテやシレルの舊宅を見た時にも、



本居宣長舊宅鈴屋及遺鈴の景

其の偉大な事業と其の質朴な家居の有様との對比を面白く感じたが、此の鈴屋の遺蹟には一層感を深うした。此の公園は四望豁然、パノラマを見るやうであるが、翁の遺蹟を移して更に崇高の趣を加へた。我が國に翁あるは我が國の誇である。松坂町民の誇は翁の遺蹟に越したものはあるまい。

城の大手門を出て數十歩、縣社山室山神社がある。社殿や瑞籬が神宮風の様式であるのは一入嬉しく感じた。小春日和の麗かさに此のあたり櫻が幾本ともなく返り咲をして居る。案内人の話に、先年東郷大將の來られた時も返り咲を見られて、流石に本居翁の郷土だけあつて、櫻は一年中

山室山神社  
本居宣長を祭る。



小笠原長生

海軍少將。  
子爵。  
慶應三年(二三  
七)生。

明州

支那浙江省寧  
波府。

望郷の歌

あまのはらふ  
りさけ見れば  
春日なる三笠  
の山に出でし  
月かも。安倍  
仲麻呂。

來て見よか  
し

名月や來て見  
よかしの領  
際。西山宗因。

いつか屍の

戈とりて月見  
るたびに思ふ  
かないつか屍  
の上に照る  
やと。森五六  
郎。

咲くのだらう。」と云はれたといふことである。(筆のまに)

一四 遼東の月

小笠原長生

古來幾多の英雄・豪傑は月に對して感慨多かりき。不幸の  
宰相をして筑紫の謫居に泣かしめしも月にあらずや。渡  
唐の學者をして明州の祖道席上に望郷の歌を詠せしめし  
も月にあらずや。新羅三郎は之を仰いで足柄山頭に祕曲  
を奏し、上杉謙信は之を觀て陣中に風流を弄ぶ。「來て見よ  
かし」と叫ぶ武骨の俠者、「いつか屍の上に照る」と述懐せる憂  
國の壯士、皆是感慨の餘ならざるはなし。月や月や、何すれ  
ぞしか多恨なる。

大和尚山

大連灣の間に  
ある島山。

柳樹屯

大連の東、金  
州の南、大連  
灣に臨める村  
落。

渤海灣頭、風吹荒び、怒濤舷を敲いて、銃を枕にする兵士の夢  
破れがちなる師走もいつかたけて、今宵最後の望の夜とな  
りぬ。更けゆくまゝに、風和ぎ水平らかにして、天地唯寂然  
たり。獨り寒月の高く冴えて大和尚山の頂に懸り、峰に斑  
の残んの雪を有るか無きかに照すもすさまじく、前方近く  
に數箇所の砲臺屹然と空に聳えながら、是また闐として眠  
るに似たり。右方を顧みれば、柳樹屯の村は煙の如く、肌寒  
げなる冬木立の間、散點せる賤が伏家に、未だ寝ぬ火影二つ  
三つあるを見る。土民國家の危急を知らず、何をか爲し何  
をか語る。蠢爾たる彼等の境涯轉、憐むべし。これにひき  
かへて、我が國民が報公心の殷なることよ、その夫その子

は召集一令の下に、銃を肩にして立ち、千里の波を蹴て、數度の激戦毎に凱歌を奏し、陣中にありて月の圓なるを見ることこゝに七回<sup>七月</sup>。その妻その父母は、家を守り幼兒を育て、費を節し産を傾けて、獻金の後れんことを恐れ、四千萬人の熱血さながら涌きかへらんばかりなり。往くも留まるも、君の御爲國の爲なれば、固より一點の未練なからん。それ然り、然れども、熱血の裏面は即ち多涙なり。今宵この明月に對して豈一點望郷の情なきを得んや。余も亦心頭<sup>心頭</sup>忽然として母の佛を浮べ出でぬ。

生きて恥死して恥なる時しあれば、

たゞ心せよものゝふの道。

これ旅順の大勝を祝して遙に余にたまひし母の歌なり。一讀再讀して、教訓の意愈、深きを覺え、唯わが身の短才愚鈍にして涓埃の功なきを嘆ずるのみ。母は余を愛して愛に溺れず、屢書を寄せて常に余を勵ましながらも斯くのたまひき、自愛<sup>体ヲ用心セヨ稱ルカント</sup>せよ、軍務に死するは武人の本懷なり。されども、し病に斃るゝか、或は軍半途に送り還さるゝか、さることあらんには、母はいかばかり口惜しからんと。されば習ひ給はぬ身の跣足に針の如き霜柱踏み碎きて、神に日參し給ひつゝ、皇軍の勝利と余が武運の長久とを祈り給ふこと、六箇月の間一日も懈り給はずと聞く。殊に夜衾<sup>解カマシテ</sup>を重ねず足袋をもはかず、又侍女に「暑し」寒し」の二語を禁じ、以て遠く余の

辛苦を分たんとし給ふ。その慈愛何にか譬へん。これに報ゆるは唯猛進道三進ムの一事あるのみ。

艦橋の欄干に凭りて沈思する折しも、忽ち聞ゆる胡歌俗歌の聲

濱邊の一隅より斷續して来る。その節一長一短一高一低、

嗚々として咽ぶが如く、切々として怨むるが如く、悲愴非情ノ悲シム坐ろ

に骨に徹し、艦上の兵士皆頭を低れてこれを聞く。無心の

月は愈、牙えて天に中し、十餘の艦影水に落ちて夢よりも淡

し。(國語教程)

一五 アルプス越その一

時はこれ西曆紀元前二百十八年、行く春の名残も惜しき五

月の末、將軍ハンニバルの召に應じて集る者は、九萬の歩兵

五十の戦象、重騎、輕騎合せて一萬二千許、總勢十萬に餘つて

根據地なる西班牙の新カルタゴの郊外に雲霞の如く聚集き

渡つた。ハンニバル陣頭に立つて命を下せば、一陣二陣繰

りいだす、春の潮の寄するが如き勢である。

エプロ河を打渡り、ピレネー山を踏破り、更に又ローン河の

象渡しに幾多の艱難辛苦を嘗めて、十月の半ば、山地に秋闌

けて天に木枯の吹きすさぶ時、ハンニバルの軍勢はアルプ

ス山に面して立つた。

仰げば絶頂は雲に隠れて、飛ぶ鳥の影さへ見え、俯せば草

木霜に枯れて、千里蕭條の裾野が原。見渡せば、嗚呼見渡せ

エプロ河 西班牙の北部より東南に流れて地中海に入る。  
ピレネー山 西・佛の國境をなせる山脈。  
ローン河 瑞西より出で佛國の東部を南流して地中海に入る。

ば幾百里、自然が築ける萬里の長城、蜿蜒として南北の世界を限る。

阿修羅  
印度神話に戦  
闘を事とせる  
悪神。

鳥も翔らず鹿も渡らぬ此の天險、人馬兵糧幾萬を擁して越えんとするハンニバルは、抑、人かはた神か、否、否、彼こそは羅馬を憎む一念に命を忘れた阿修羅アシュラであらう。道に半ばを失つて、總勢今は五萬許、吹きおろすアルプス山の山風に、征旗堂々と押立て、此の天險を登つて行く、その意氣込は天地を呑まんばかりである。或は槍を杖づいて岩角を攀ち、或は木の根に縋つて崖を登る。一步登れば一步は更に危く、一崖攀づれば一崖は更に峻しく、山は層一層前途を塞いで、恰も行軍を拒むが如く思はれる。

茲に又一段の困難を持來したのは、山中の野蠻人であつた。彼等は峡谷山隈の各部落から雲の如く集つて來て、軍隊の行く手を塞ぎ、左右の峯から巖を轉がし石を投げて行軍の道を遮り、隙に乗じて軍馬兵糧を掠めて行く。世界の險山を住居とする蠻人は、嶺の小鹿か、梢の猿か、崖を傳ひ巖を攀ち、森を貫き藪を潜つて、追へば走り、引けば集る。智謀に長けたハンニバルも、これには殆ど當惑したが、色々手を盡した末に、探り得たのが蠻人どもの習慣である。

彼等の習慣として日のある間は、隨分山中を活動するが、日が暮れると同時に小屋、洞穴の口を閉ぢて、一步も外へ出かけない。此の事を探り知つたハンニバルは、晝は山陰に屯

して兵を休め、日没に及んで進軍することに定めた。

暗愴たるアルプス山の夜道を照すは、木枯に研ぐ星の光、高峰に磨く氷の光、踏む足下の覺束なくて、道はなかく歩



ぬ。兎角する間に朝日は昇る。それを合圖に野蠻人等はまた現れて、山上から轉がし落す大磐石、崖下の軍勢は見るく中に千仞の谷底へ跳落され、切立つた岩石に打碎かれて、谷間の雪忽ちに紅の血潮に染まり、吹來る風は血煙を含んで、腥く、反響は人の叫を返して物凄く聞える。

この際思ひも寄らぬ奇功を奏したのは象隊であつた。小山の様な動物が、身體にだぶ肥エたフツシマムシの波を打たせて、暢氣さうに歩いて來ると、蠻人どもは膽を潰して驚いた。此の驚はやがて恐怖と變つた。すべて不思議なものを見て恐を抱くは無智な者の常である。流石に淫ワテ悪ム獐猛な蠻人ども、此の不思議な動物には恐をなして、容易に傍へ寄らなかつたといふ事である。

一六 アルプス越その二

悪戦苦闘を續けに續けて、險山を踏破する事既に八日、麓に足を入れてから九日目に、全軍は漸く絶頂に達した。歐羅

巴の屋根と云はれるアルプスの絶巔、氣澄み空晴れて、南歐の平野は遠く開け、世界は全く一變したやうな感じがする。ハンニバルは敵國を眼下に睨んで全軍を止め、今や我等は伊太利の城壁を登り盡せり、否實に羅馬の城壁を登り盡せり。是より先は下り道、見よ、彼處の野に到着せば、三度とまでは闘はずして羅馬は我が手の中に入らん。將軍の意氣天を衝けば、士卒の意氣も亦天を衝く。アルプス山上カルタゴ全軍の士氣は既に伊太利の平野を呑み、全軍の心は既に羅馬の都門に、城下の盟をなさしめたやうに勇み立つた。是より後は下り道、唯一息と思つた道は、前より一層險しくなつた。しかも二三日打續いた寒氣に、山は一面の氷とな

つて硝子を張つたやうな崖路を傳つて行かねばならぬ。過つて一人滑ると、それに押されて次から次へ人なだれを打つてどつと滑る。無慚にも千丈の谷の底へ、數百人の兵士を一時に葬つて了ふ事が度々であつた。殊に馬などは滑り落ちると、身體の重みで氷の中へ陥つてそのまゝ凍え死ぬのである。八寒地獄の有様も思ひやられて實に悲惨の極みであつた。

困難に困難を重ねながら漸くに進んで行くと、茲に又意外の大難が控へてゐた。見れば前面一町ばかり崖が崩れて、行くべき道は塞つてゐる。仰げば峻峯雲に入り、俯せば幽谷奈落に達す。嵐に翔る猛鷲の翼は知らず、地を行く人間

の足を以ては、通過すべき途がない。かゝる際にも物に動ぜぬ將軍は、直に全軍を引止めて、其處に露營の陣を張らせ、翌日より將軍自ら一隊の兵を指揮して、岩を動かし石を切り、非常な障碍と戦つて、漸く人馬を通ずるだけの細道を開き、先づ飢と疲勞とに弱り果てた一群の馬を籠の牧場へ送つてやつた。

其の後猶三日間工事を續けて、象の通れる様に此の道を廣げた。此の工事のために滞在中、途に迷つた象や馬が段々集つて來たので、それを併せて隊を整へ、漸く此の難處をも通り抜けた。

併し困難は此處に盡きたのではなかつた。或時は吹雪に閉ぢられて道を失ひ、或時は寒風に曝されて指を落し、辛うじて麓に近いアオスの村に着いたのは十月末の事であつた。

アルプスにさしかゝつてから今日まで丁度十五日、新カルタゴを出發してからさつと五箇月、出發當時十一萬の大軍は今數ふれば二萬六千、しかも其の生き残つた者共は、何れも肉落ち骨現れて、恰も餓鬼の如き有様である。餓鬼よ餓鬼、誠にこれこそは羅馬の血に飢ゑたカルタゴの餓鬼、今此の餓鬼が突如として、アルプスの險を踏破り、北伊太利に暴れ出たのである、羅馬の運命もまた危いかな。

(内外歴史講壇による)

柴田鳩翁  
名は謙藏。  
京都の心學  
者。  
天保十年(一四九  
七)歿す年五十  
七

一七 壺

柴田鳩翁

さる御町内に婚禮振舞がござりました。お年寄をはじめ、町役家持の人々、一同に座に就きますると、様々の馳走がある。時に、かの年寄は、酒と聞いては酒の露にも酔ふ程の下戸ぢや。座中を廻る杯の間、退屈さうにしてゐられると、亭主方が氣の毒に思ひ、「お年寄様は御酒は召しあがらず、御退屈にござりませう。ちとお菓子なりとも御取り下されい」と、南京の古染附けの壺に大りんの金米糖を入れて年寄の前へ持つて来る。座中も「これは好いお心附き、ひらにお菓子ひらを召しあがられい」とすゝめる。年寄もわるうはなし、然

景清  
悪し兵衛。  
美保谷  
十郎。  
源平屋島の戦  
に景清十郎と  
追うて兜の鎧  
を捉ふ互に曳  
きあひて鎧ち  
ぎる。

らば頂戴を致しませう。」と壺を引きあげ、手首を突込みしなフシル杯に少しきしむやうに覺えたが、無理に手を差入れて撮み出さうとするに、手首がつまつて抜けませぬ。どうぞして抜けるかと、色々にこじまはして見ても、ひつばつて見ても、抜けず、まご／＼して居らるゝと、側から見つけて、「どうなされましたぞ。」いや手が少しつまりました思ふやうに抜けませぬ。」と眞顔になつていはるゝ。「それは氣の毒、私が壺を持つて居りませう。無理無體に手をお引きなされ。」と、一人が向ふへまはつて壺をつかまへ、あとへ引くと、年寄は手を前へ引く。互にえいやと引合ふ有様、景清と美保谷が鍬曳を鍬する様など、座中が一同にとつと笑へど、年寄はなか／＼笑



司馬溫公

名は光。  
宋の政治家、  
歴史家。  
六十八にて薨  
ず温國公を贈  
らる。

はず泣顔になつて、「どうも痛んで抜けませぬ」といふ。さあ、これから大騒になり、「醫者どのを呼んで來い。接骨ではないくまいか」と、酒宴の興も醒めはてました。時に五人組が一人進み出で、「いづれもお騒ぎなされな。我ら承つたことがある。昔、司馬溫公といふ人、幼きとき、大勢の小兒と共に大きな壺のほとりに遊びましたが、一人の小兒、誤つてかの壺の中へはまりました。大勢の子供はこれを見て逃げ歸つたが、司馬溫公一人は歸らず、傍なる手頃の石を取つてかの壺へ投付けましたれば、壺は割れてはまつた小兒は不思議に命を助りました」と或人の話ちや。今、お年寄の御難澁は、この話によつて似てある。いざや、我らが

司馬溫公となつて、たとへばその古染附けの壺が、失禮ながら何程高金の品でも、お年寄の腕には換へられぬ」と、白髪をしかつべらしく煙管を提げ、向ふへ廻れば、年寄は氣の毒さうに、壺を被つた手を突出すと、只一打に打碎いた。何が、座中は金米糖が散らかつて雪を降らした様になると、「やれ、お年寄お助りなされたか」と其の手を見れば、抜けぬこそ道理なれ、金米糖を一杯つかんで居られたと申すことちや。何と、をかしい話ではござりませぬか。つかんだものを放しさへすれば、自由自在に手は抜けたものを、一度つかんだら首がちぎれても離すまいと片意地なうまれつき、それで自由自在の大安樂が出来ぬのちや。か

く申せは金錢の事のやうなれど、つかむものはこればかりではない。器量のよいのをつかみ、賢いをつかみ、力の強いをつかみ、家柄をつかみ、身代のよいのをつかんで離すまいとかつぎ歩くによつて、教を聞く事もならず、樂をする事もならず、慎も出來ず、せん方をさに癢氣抑へたり、顔しかめたり、酒飲んで紛らしたり、さりとは氣の毒なものでござります。壺割つて仕舞うてからは、何いうても詮ない事ぢや。身代の壺を割らぬさき、御用心が第一でござります。

(鳩翁道話)

幸田露伴  
名は成行、  
文學者、  
文學博士、  
慶應三年(三三三)  
七生。

一八 雪前雪後

幸田露伴

雨も好し、露も好し、霞も霽も天より降るもの、面白からぬは無きが中に、雪はまた特にめでたし。降らんとして未だ降らず、灰色の雲の天空を蔽ひて風無き寒さに雀ふくらむ程は兎もあれ、角もあれ、そと下す風に連れてちらく、と降り出づる始より、檐の玉水日に耀ふ光長閑に融け盡す終まで、いづれかをかしからざらん。

まづ冬の雪の粉の如く、球の如く、笹の葉に牙ゆる音立て、椋の葉に堅き音立て、板庇にはいたく跳ね返りなどしつゝ、さらさらと降りたる、見るにも興あり、聞くにも面白し。又春の雪の大きく、軽らかに降りて、落つる間もなく色無き水の昔にかへる淡々しさもなつかしく、消ゆるくも少し

は積りて、茅葺の屋根に鹿子斑の夏の富士を見せ、松梅・樅な  
 どの梢には雪、華、俄、に落ちかゝるかと思はしむるも趣あり。  
 されど降る最中の雪の、見て美しきは、冬の末かけて春の初  
 の頃陽氣既に動きて陰氣猶いと盛なる時のことなり。寒  
 さ甚だしからねば雪細かならず暖かさ未だしければ雪は  
 水めかずして恰も好く、且大きく且輕やかなるに、しかも一  
 年の中最も降るべき折なれば、其の霏々雨、雪、が、入、り、ま、じ、り、降、る紛々として盛に下  
 るに當つては、櫻花の春天に翻るが如く、葎、絮、の、秋、風、に、漂、ふ  
 が如く、一江の野渡には對岸を虚無に封じて仙境の縹渺た  
 るを欺き、片、浪、町、を、こ、し、て陋街には連屋を瓊瑤に包んで蜃樓の巍峨  
 たるを疑はしむ。鶴毛亂れ飛び、鷺、毛、を、こ、し、て鷺毛飄り零つる景色、見る

眼もあやに美しき限りなり。

すべて降る時の眺には廣きところより狭きところ好し。

玉屑珠塵いと清きことは清けれども、もと色を奪ひ光を障日光  
 ふるものなれば、降りしきる真中は、遠きは全く見えずして  
 却て狭くなり、近きは聊か霞みて狭きは却て廣くなり、大川  
 より山間の溪、廣野よりは市中の園よろし。

霽れての後こそ雪は目ざましけれ。塵埃拭ひ盡して鏡新  
 に明かなる空の蒼々と朗かなるが下に、物、カ、ス、残、り、物、を、こ、し、て渣滓鍊り去つて銀  
 曇り無き地の皎々と白きが、見る眼もはゆく遙に開けたる、  
 常の日はたゞ裾寒き風の枯草を吹くのみなる空野の取り  
 どころ無きだに面白くおもはる。「馬をさへ眺むる」と人の

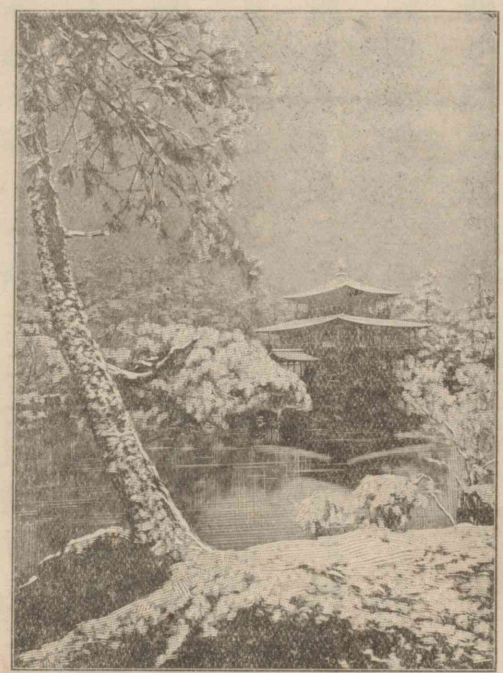
馬をさへ  
馬をさへなが  
むる雪の且か  
な。芭蕉。

眞如堂  
京都市の東北  
にあり。天台  
宗。

岡崎  
眞如堂の南、  
平安神宮の  
邊。

梅尾・槇尾  
共に京都市の  
西北方にあ  
り。高尾と合  
せて三尾と稱  
し紅葉の名所  
なり。

云ひたる旦、朝日の光いと花やかなるに、疎林に禽起つて飛んでまた還る、有りふれたる郊外のさまながらもよし。



寺 閣 金 の 雪

て千古ひやゝかに峙ち、潭は藍靛を湛へて一脈おもむるに流るゝ雪の日の凍れる寂しさに、群蓋梢重く壁の簪を戴け

西の京は金閣・銀閣・眞如堂・岡崎・東山・清水皆畫とすべし。梅尾・槇尾は見ねば知らぬぞ口惜しき。木曾の寢覺の床の巖は塊斧にまかせ

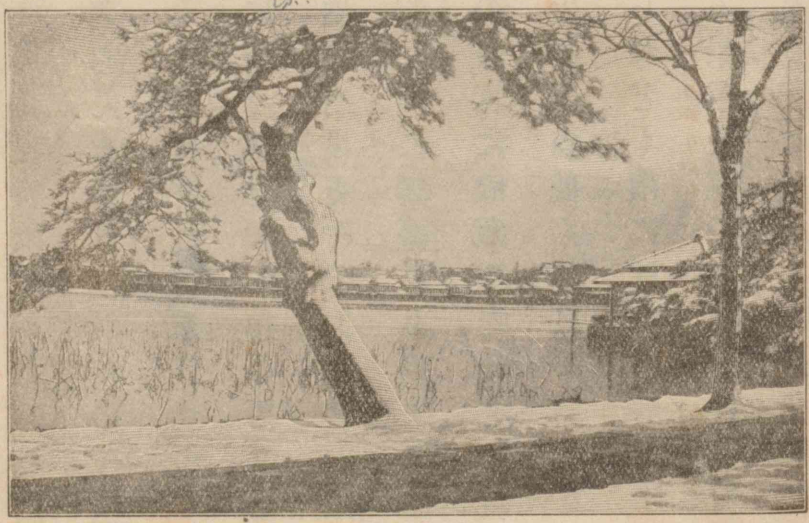
山王臺

麴町區永田町に在り。日枝神社のある處。

溜池  
山王臺の東南麓にありしが今は埋められて宅地とな

る松の村立のあたり、姿をも見せて名をも知らぬ山の禽の餓を鳴きたるなど、二十年の昔の今の胸に猶あざやかなり。

東の京は御溝の水おだやかに、浮寝の禽の夢も安けく、雪にしづかなる大御代の午、またぐひなくめでたし。山王臺今は好からんが溜池のありしむかしいたづらに



池 忍 不 の 雪

待乳山  
隅田川の右岸  
淺草公園に近  
き小丘。

相生橋  
深川區越中島  
より京橋區新  
佃島に架した  
る橋。

中島  
深川區越中島  
の一名。

なつかし。不忍の池一望千頃の景は言はずもあれ、石橋の  
小やかなるを渡つて湖心に至らんとすれば、敗荷の殘莖に  
一撮の白きものを見たる、これも捨てがたき風情あり。暮  
れて猶暮れがたき雪の闇夜に、何をか物言ふ鴨のさゝめき  
を聞きたる、水に色無く聲に白さ有りとか云ふべき。隅田  
川は待乳山を望みたるも好し。山に舞臺あり、臺より望み  
たるも好し。一條の碧、四方の白、實に武藏野を分きて流る  
る川なりとたふべし。相生橋の橋長く、中島の島小なる  
取りいで、云ふべきにはあらねども、南に涯無き海をすか  
して、海鷗も雪に曇る渺茫たる景色を、欄干の玉を展べ樹立  
の鷺を宿したるに劃りて一幅の畫としたる、欣ぶ可く、賞す

べく、此處をこそ今の京には雪の見どころとすべけれ。

(洗心録)

橋成季

鎌倉時代の  
人。

兼光

姉小路兼光。

建久七年(一〇五  
六)卒す年五十  
二。

一九 釜盜人

橋 成 季

中納言兼光卿、建久二年十二月廿八日に、檢非違使別當にな  
りて廳務ことにおこし沙汰ありけるに、賤しきもの、小屋  
に小さき釜の失せたりけるを、隣なりける腰居が盗みたり  
けりといひつぎありて、贓物をさし出したりけるに、腰居申  
しけるは、手をもちてこそゐざりありき候へ。手を離れて  
はいかでか取り侍るべき。他人ぞ盜置きて侍らん。と陳じ  
ければ、まことに申すところ理なり。と沙汰ありけれども、盜

大理  
檢非違使別當  
の唐名。

まれたる者の訴訟強くて、大理の門前に召出して内問あり  
けり。

相論事ゆかさりけるに、別當謀をめぐらして、この腰居申す  
ところ不便なり。唯この釜をば腰居にとらすべし。と仰せ  
くだしたりければ、腰居悦びて頭に打被きてゐざり出でけ  
るを見て、實犯なりけり。かたはの身なれども、かくして盗  
みてけるよ。と覺りて、科に行はれけり。ゆゑしかりける謀  
なり。(古今著聞集)

二〇 古今千遍

雨森芳洲

舊歲御状相違一 御返書未は候うち

休ム

雨森芳洲  
名は誠清。  
對馬侯の儒  
臣。  
寶曆五年(四二  
五)歿十年八十  
八。

新歲の芳翰又相違一 亦拜見仕候弥  
御仕固に重業成候由懃此事に存  
奉り候此許相變多私儀無為に罷在候西度  
昔下御佳作見せし候上京以後別々  
御精書候事に座在や 格別に上達  
成候様存下奉り珍重之に過ぎず候詩は  
做多者多高量多と申候兎角多く御作成候  
上手に御成り候と云ふ高量の字先づは人と相誤  
す候を申候と人と相誤致すばのりに候は  
之なく心を以て心に問ひ我が心より思案する事



き事に御座候得し私最早世間に望ある者なり之  
 なく候為ば此致して死を待ち候し一奇事と  
 存じ立ち奉事に御座候此段書きつけ御目に懸け  
 候し老人がよき存候事に御座候故皆様に  
 御年少少御座候より進んば尚候にこそ春  
 かなしき御座候御座候此の如くに御座候同士の面  
 へ御座候御座候御座候御座候御座候御座候御座候  
 奉り候申度事し御座候御座候御座候御座候御座候  
 早貴答に及び候餘は後方を期し候恐謹言

(新撰書簡集)

石川依平

遠江の歌人。  
 安政六年(三三  
 九)歿す年六十  
 九。  
 くもりもは  
 てぬ  
 てもせすく  
 もりもはてぬ  
 春の夜の朧月  
 夜にしくもの  
 ぞなき。大江  
 千里。  
 まだしき  
 五月來ば鳴き  
 もふりなん時  
 鳥まだしきほ  
 どの聲を聞か  
 ばや。讀人不  
 知。

二一 四季の月

石川 依平

梅咲く園に霞みつゝ、  
 曇りも果てぬ朧夜の

峰の櫻の花ぐもり、  
 月こそ春の光なれ。

まだしきほどの時鳥、  
 馴れて涼しき月影に、

はつね待つ夜の枕より、  
 閨の戸さゝで明すなり。

桐の葉わけにかけ見えて、  
 立待ち居待ち待ちとりて、  
 秋とほのめく夕べより、  
 幾夜か月をながめけん。



木葉ふりしく山の端の  
雪に照りそふ月影を

時雨にくもり霜に牙え、  
月故をなせ  
などすさまじと思ふべき。

(今葉歌集)

川上眉山

名は亮。

小説家。

明治四十一年

歿す年四十

四日

明治三十一年

一月四日。

森戸の川  
相模國三浦郡  
葉山村を流る  
る小川。

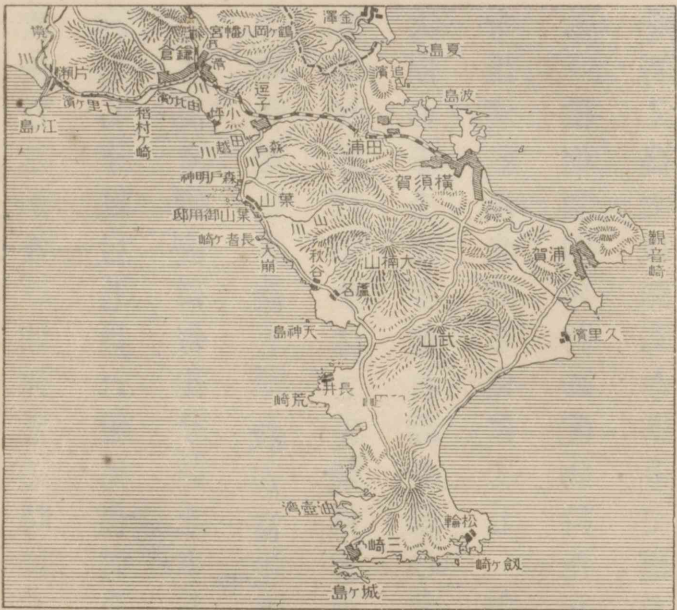
三三 三浦路

川上眉山

四日早起、昨夜起草したる稿を繼ぐこと少時、別に私書二通を認めて日高く宿を出づ。松風は靜かに醉を吹きて浪いと優しげに磯を打つ。空は晴れたり、見渡す島山は打霞み、雲雀は高く上に鳴き連れてさながら春の心地す。道は更によし。一帯の沿岸風色すべて佳なり。

森戸の川を渡るに、一岬松深く、風情やさしき處こゝに明神

の祠あり。千貫松とやらん昔ありしと聞けど今は見えず。



三子浦附近地圖

崎は遠く、蒼々十幾里、大島の煙はほのかに空をかすめて、伊

岩礁漸く繁し。既にし  
て一岬高く出でたる長  
者が崎の上に出づ。風  
色更に佳なり。由比が  
濱、稻村が崎七里が濱の  
波は玉を延べて、江の島  
は實に盆石を浮べたり。  
長井の荒崎は南に長く、  
天神が島は近く、三浦が

大島  
一。伊豆七島の

豆の山脈は蜿蜒として、はるかに雲煙の間に出没す。我が富士なるかな。如何なる時にも處にも秀いよ、秀に従容迫らず、麗はしけれども侮られず、しづかに扶桑の美を收めて高く雲表に傑出す。をりしも淡靄かすかに裾を罩めて、空の匂いと深し。我が富士なるかなと獨り斷崖の上に立ちてしばし去ること能はざりき。大崩の下を過ぎ、浪打際を縫ひて處定めず行く。十歩一景を生ず。風光到る處によし。既にして暫く田畦の間に入る。僧侶三四、年賀の配物持たせて各戸を廻るに遇ふ。前を行く農夫に語らひ寄りて道を共にするも、いとをかし。苦打つ竹を擔げて行くもの、魚籠肩に急ぎ來るもの、まだ正

月の遊びありくもの、背負梯子を背後に焚木を積み重ねて熊手さしかけて歸るもの。處を問へば此處を蘆名とかや連の男我が爲に遠廻りして導きて又渚に出づ。鹿島といふは此處らあたりなるべし。白沙前に走り、青松後を遶りて、いと麗らかなる入江なり。海は凧ぎて鏡の如し。見渡す方は皆打煙りぬ。投網を手にしたる男三人海中に立ちて鯔の寄り來るを窺ふ。一群の士女紅紫を交へて渚に立てり。眞砂を踏んで屈曲したる濱邊をなほ行くこと少時、僅なる鹽田を見る。鹽焼く煙もあらばと思へど、竈は閉したればにや煙は見えず。空は霞み渡りて浪いよ、優なり。

のどかに、打語ひつゝ、徐歩して長井の村に入る。連の男の酒を好むといふに、飲ませんと思ふ興深く、強ひて酒亭に案内せさす。土藏づくりの中二階に通されて窓を開くに、海其處もとに近し。丸裸なる漁家の兒群三十人ばかり手に手に標繩（しるしづな）を持ちて地を打叩きつゝいふ、出さいな、出さいな、出ないものはがにくぞうと。相追うて去る。

酔うて長井を出てたるをいつとも覺えず、（山麓）端山繁山深くはなけれど、樹の間がくれの茅が軒端に竈の煙の立ちのほれる方を、むかし和田義盛が生れし處ぞと聞きて、丸三つ引の旗風にこゝらわたり（あ）の野をも山をも打靡かせたる三浦の一黨が鎧（よろい）爽（さわ）やかかなりし（武者格、目まぐるし）當時を思ふに、村老既に記せず、行人

和田義盛

源頼朝の功臣。三浦氏の一族。和田は今、長井村の大字なり。

更に顧みもせて、行過ぐる山田の畔に鴨一羽ちよろゝ、駈けありく風情またあはれなり。古人こゝにあり、吾今こゝにあり。鳥兔（うさぎ）匆々（かたかた）七百年。縦令其の人々は立つて乾坤（てんてん）の上（うへ）に挺（た）んづべき大人物ならざりしにせよ、今將こゝに來る多少の感慨なき事を得んや。傍への孤つ松に近寄れば、鴨驚きて飛ぶ。四面寂たり。行脚（ぎやく）の僧一人遠く山越しに行くを見る、佗（た）しかりき。

既にして行くゝ又海を見る。日は早く暮れんとす。堤防長く練絹（ねんきぬ）の如き波を限れる水の江の際に出づ。鳥あり波島といふ。右に荒崎を望み、左に黒崎を指す。夕日を洗ふ沖の白波、一簇（いさむら）しげき磯松の水に躍つて空に飛べる、墨色

草臥れて  
草臥れて宿か  
るころや藤の  
花。芭蕉。

ただ秀でたり。舟もなし、鳥もなし、臙脂を流す雲と波とそれも暫し、日は西に名残の色をとめて忽ちにして水のあなたに入る。草臥れて宿かる頃や花の香を探るべき時にも處にもあらねば、道端に蘿蔔積みかけて、明日は房州におくらんと立働ける男に問うて、外に宿をなければ止むなくいぶせき家に泊る。主人は三崎に魚を求めて未だ歸り來らず、飯待つほどに名ばかりの庭に出づれば、暮煙近く島根を裹みて、水の色心ゆくばかり美しきに、「家に舟ありや」と聞けば、「あり」といふ名を何とか言ひけん家の子を呼びて舟装ひせさす。櫓拍子靜かに聽て漕出づる波の上の心またなべてならず。煙

清見瀉  
駿河國庵原郡  
興津町の海  
邊。

波縹渺として近きは黒く、遠きは白く、漁村の燈火二つ三つ松の樹の間にきらめけるあたり、炊煙一朶の雲を吐きて、稍見え初むる星屑のそれも亦よし。舟は搖々して浪を分けて行く。思ひぞ出づる、癸巳の歳、日々清見瀉に舟を浮べて山と水と月とに明くるを忘れたる事もありけるが、歲月流るゝが如し、我に馴れ睦びたる彼の酒好む老漁夫如何になりつらん、今も猶我が與へたる盃を銜み居るにや、はた死にけるにや。東西幾十里、此の星同じく其の家をも照せどもと思へど甲斐なし。人の心の嬉しさよ、其の歳七月、我都に歸らんとするを送りて、涙を含んで興津の停車場に立ちける時、目をしばたゝきて、且那樣命があつたらまた御目にか

かりませうぞ。私は取る年ぢや。これが水のお別になる  
 かも知んねえ」と岩の如き身を泣崩しけるあはれさに押し  
 て再會を約しけるが、汽車既に發するに、彼なほ去らず、走り  
 來りて、「旦那様よ、まめで御座れよう」と。其の聲猶あるが如  
 し。櫓聲俄に聞くに堪へず、急に船を漕戻させて宿に歸る。  
 老漁夫なほ念頭を去らず。酒を飲んで愁を消するに愁更  
 に長し。あゝ彼、一介の僮夫ながら、深き所縁もなき我を動  
 かすこと斯の如し。一片の衷情菩薩の如きものあつて存  
 せしなり。原頭人日々に墳墓を築く、知らず彼なほ健やか  
 なりや。去年沼津に赴きける時は事多くして行くを果さ  
 ず。此の度こそは彼が家を叩きて、笑ふ時は赤子の如く、奮

ふ時は野牛の如き彼に再び遇はゞやと盃を捨て、眠る。  
 夢は我を彼の浦に載せざりき (眉山美文集)

二三 友に寄す

高山樗牛

高山樗牛  
 名は林次郎。  
 文藝批評家。  
 文學博士。  
 明治三十五年  
 歿す、年三十  
 四。  
 この文は明治  
 二十九年一月  
 六日熱海の客  
 舎より學友藤  
 井健治郎に寄  
 せたるもの。

如何御暮しあそばさるや此方お交りす  
 碁石 碁石在は間餘事なうり御安心下さ  
 ねたふ此頃を事に終れ此無沙汰り  
 打過ぎひ毎度勝手の手のみ御頼り  
 申上げ此面倒案入候徒然の折に也

魚見崎  
熱海町の南端  
なる岬。  
真鶴崎  
相模國足柄下  
郡にある岬。  
熱海の北方三  
里。

物ほきまゝ色々誼文中よびども實  
際手にとらは禱に水座の水彩畫して  
そ描きみんそ先頃繪具など取寄さし  
つども是まゝゆきに觸まざる願はれ我な  
らば佳しくも暮らさるるを思ふは  
つどもそれりゝちながた樂しく過し  
申候  
小生の室は熱海中より最も眺望よき處  
より魚見崎より真鶴崎まで雙眸の裏

ハイネ  
調達の詩人。  
(1797-1856)

い草まゝ朝日新きし入る頃よ起き出で、  
九時頃より濱をなど散歩致し午後は  
圍碁大う碁に費すが毎これ例よ何時ふ  
ち一卷のハイネ集を携へて山腹の芝原  
に仰臥し大海の浩蕩ハイト大平ナを對して朗吟する  
こととも亦存ひ或は日暮の空ひとり磯をこの  
松に腰おたせ夢ともなく現とをなき思  
に耽ることもこれあり修げや自然の無盡  
蔵なる今はた駭馬かゝるうりに亦存ひ

我も人そ自然とく口にも言は言(我人  
 か其の真意を會得らるや天の郷地の  
 郷音思ひ見るたよ高く深く候へどもそれ感  
 ずる人の心は如何ばかり高く深きものに候  
 べきやうく夕日影も名残なく暮ま果て、  
 渾火ほの見ゆら頃お相成候へばぞあんなどくの  
 波音のみ高く相成り水と空とれ別も消えて  
 天地を一つにならまらんと思はるゝころ夜  
 と眠のたまた造らまらまそのにあらずとの

詩人此言葉の今更お思ひ出でられ候  
 去年の暮より二三日前までは月色殊の外  
 めでたくあがず夜をふらふし打眺免申候  
 元日の夜も十七夜なりしゆ五月の海を出  
 づら頃小生の宿に世川姉崎大橋熊谷の  
 諸氏と共お觀月の不宴を張り申候ひき  
 一昨宵の夜九時頃までも候ひん林り  
 就らんとりはらふら宮の間より海邊をな  
 がめれば缺月ながら一間をのり海と離れ言

ふたつとりのなごめさき景色よみてひり  
 おぼ下女に命じて 雨戸をあきかせ欄干  
 ようてハイネを朗吟致す其時の心地よき  
 あはれ心なれに力まわ石よも金にまなれかしこ  
 思ふれひひき

貴兄等はさぞかし 日々御勉学の事事お  
 ろんと羨まき申す時より 御文賜ひひ  
 うし 病氣も大方を宜しく 間御心配下  
 さるまじく候申上げたまし事山くこま

ありひつとをまづこれより筆をとめ候

(櫻牛全集)

菊池幽芳

小説家

名は清

明治三年生

天筒山

金ヶ崎の東南  
に接する山。

二四 金ヶ崎懷古

菊池 幽芳

金ヶ崎神社は、天筒山の一脈、敦賀灣に斗出し、金ヶ崎の岬を  
 なせる山崖にあり。祠のある處、即ち金ヶ崎城の遺址なり  
 といふ。後醍醐天皇の皇子、尊良・恒良兩親王を祀れるなり。  
 石磴の半ばより、少しく右に登れる處に、攝社絹掛神社あり。  
 こは同じ延元の役に殉せる藤原行房・新田義顯・氣比氏治・瓜  
 生保等の靈を祀れるもの。祠の傍に、延元古戦場の碑あり。



境内に櫻と楓と多く、春は吉野の宮の故事をしのばせて、一夜の嵐に散りし皇子達の脆き散際を想はしめ、秋は一片の丹心誠心、王事に殉せる諸將の血もて、木々の梢を彩るかと思はしむ。仰げば天筒山の翠袖緑の袖に滴らんとし、野坂榮螺の高峰チリヤトシイ歴亂として、或は雲より拔出で、或は雲に隠れ逆さまに影を敦賀灣に蘸す高ス。一角遙かに出でて灣を抱くものは、是立石の岬なり。嘗て碧血生血を流せる地、風光一に何ぞ佳なる。余此の地を訪うて低回顧望し、覺えず潜々サヤコヒシラニとして涙下る。金ヶ崎城没落の歴史は、實に何人をも流涕せしむべき悲劇にあらずや。

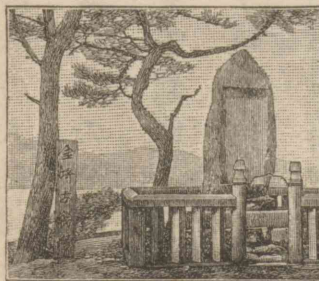
時は延元元年冬十月、新田義貞、東宮恒良親王、一宮尊良親王を奉じて北國に赴き恢復を謀らんとす。供奉の人は誰々ぞ。洞院實世、同定世、藤原行房、同行尹、三條泰季等の公卿に、義貞、義顯、脇屋義助等の一族郎黨あはせて七千餘騎、木芽峠にて大雪に逢ひ、士卒凍死するもの多く、やうやくにして敦賀に着けば、氣比宮の祠官氣比氏治等、迎へて金ヶ崎城に入る。その月二十日、義貞兩宮を船に迎へまつり、漁舟一隻一篷の月を載せて、管絃笛、笙、箏、三味線の御遊を催し、越路北陸道の空の草枕、逆旅旅宿の御情を慰め奉る。げにや、かゝる時にも風雅を忘れざる延元武士の面影を今も移して、年の十一月には御船遊の神事をなすが例なりとぞ。

既にして、尊氏大舉して金ヶ崎城を圍ましむ。延元二年に

至りて城中やうやく食竭き、馬を殺して其の肉を食ふに至りぬ。義貞更に兵を擧げんとし、ひそかに城を出でて、杣山に赴く。されど、事志と違ひ、彼是する間に城中の食全く盡きぬ。賊之を知りて、遂に城中に入る。由良・長濱の二將、新田義顯の前に進みて急を告げ、「今はこれまでなれば御自害あるべし」とこそ存じ候へ。その程は我等防ぎ矢仕るべし」と言ひ終りて、取つて返せるに、二人、餘りの疲労に足も快く立たず、死人の肉を食ひ、それを力にして戦ひぬ。



金ヶ崎宮及び古び戦場碑



義顯、一の宮の御前に参り、「今はこれまでとこそ覺え候へ。我等、弓矢の名を惜む家、自害仕らんずるにて候。上様の御事は、たとひ敵の中へ御出候とも、失ひ進らするやうの事はよもあらじ。只かやうにして御座あるべしとこそ存じ候へ」と申上ぐれば、宮は快く打笑ませ給ひ、「否とよ。われ汝等を失ひ、ひとりながらへて何かせん。敵に辱を受けんよりは、命を白刃の上に縮めて、怨を黄泉の下に酬いんには如何じ。如何に自害はするものぞ」と、思ひ入りたる仰のほどを聞きて、義顯感涙止めもあへず、「かやうに仕るものにて候」と云ひもはてず、刀を逆手に持ち、左の脇につき立て、右の脇の

肋骨二三枚かけて搔破り、その刀を抜きて、宮の御前に差置  
けば、宮は、やがてその刀を取り、雪なす御膚を現にし、ぐさと  
御胸のあたりに突立て、義顯が枕の上に伏させたまふ。頭  
大夫行房以下、いざさらば、宮の御供仕らん」とて、一度に皆腹  
を切れば、庭上に並み居たる三百餘人の兵士、互に刺違へ刺  
違へ、いやが上に重り死しぬ。かくて、金ヶ崎城は遂に陥り  
ぬ。

これよりさき、氣比齊晴、御年まだ十五にて渡らせらるゝ東  
宮をば、小舟に乗せまゐらせ、自ら遊ぎつゝ、御舟を援きて蕪  
木浦イヌクノに落しまゐらせたるを、無慙イヌクノや夜明けイヌクノて敵の手に捕へ  
られ、やがて京師に送られて、四月十三日、足利直義の進めた

蕪木浦  
越前國南條郡  
にあり、金ヶ  
崎の北五里。

る鳩毒トビノドクのため、果敢なく蕾の花は散りをはんぬ。これを金  
ヶ崎城没落の哀史とす。

事の悲惨なる、斯の如きはあらじ。我今來りて金ヶ崎の一

角ミヅノカに立てば、江山蕭條として陰雲低く迷ひ、日色暗くして氣

沈み、風死して細雨濺ぐ。敦賀灣の水面一波を揚げず、敵と

見ゆる鷗もなければ、関の聲に紛ふ松風の響もなし。烟雨スミ

澹ワスレとして海と山と靜かに暮れんとす。あはれ悲劇を見し

ものは江山にあらずや。悲劇を語るものは江山にあらず

や。われ一たび江山に對して相識の如し。頭を舉げて山

を見、頭を垂れて海を見る。踟躕チヂウすること久しうして去る

能はざりき。 (日本海周遊記)

〇 二五 表忠塔

一面に小松を植ゑちらした白玉山を電光形にぐんぐん登つて表忠塔下に來た。海拔四百八尺、新舊市街の中間に聳え立てる此の山の頂からは、旅順を一目に見晴し、東には茫茫たる海を眺め、表忠塔の建立場としては、げに絶好の位置である。遠望すれば、巨大な白蠟燭を山上に突立てた様な此の塔は、下を花崗石、上をコンクリートにして、高さ二百十五尺、如何にも美しい燈臺式の記念碑で、塔の頂上に電燈がつくと、十數里の海上から見えるといふことである。塔内は十階になつて、階段を踏んで登れるのだが、今日は時刻が

晚いため、登れなかつた。塔下の小苑に金盞花の赭黄色な花が、まだ霜にも枯れず咲いて居る。

表忠塔を背に、平たく削りならされた山頂を北へ歩いて鳥居をくゞり、石段を上り、納骨祠に詣でる。白玉山の北端に石垣を四角に築きあげ、上に小さな石造の祠が南面して立つて居る。白玉神社といふさうな。旅順を落す爲に命をすてた海陸軍人二萬二千七百餘の白骨が此の下に埋めてあるのだ。

何時しか落ちかゝつた日は紺色の雲の間から生々した血の色を見せて居る。と見れば、我等が立つ白玉山を繞る旅順界限の山又山、狐の皮の如く霜枯れた裸山、破壊された砲

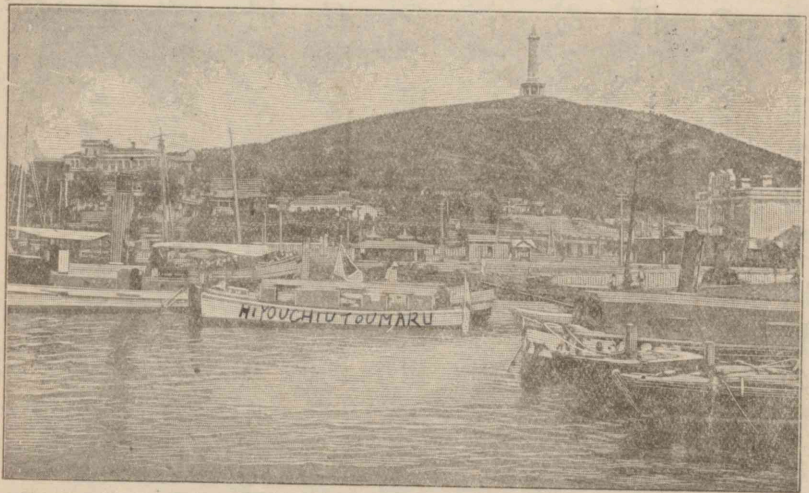


表 忠 塔

臺の山、生命の去つた荒寥たる山々は、雲間漏る落日の爲に赫として茶褐色に燃え切つた空氣の中に、毒々しい程はつきりとしたパノラマを現出した。其處に一發の砲聲も響かず、一聲の人語も聞えぬ。風すらも吹いては居らぬ。自然は鳴をしづめて居る。而して其の強烈な色彩を以て旅順の山河は今叫

喚をあげて居るのだ。十年前、二十年前、二度までも人の子を殺し合ふ修羅場となつて溺るゝ程に血を浴び、嘔くまでに血を飲まされた旅順の大地は、今夕陽に血を吐返し、死の苦みにもがいて居るのだ。氣息もつまるばかり凄慘の氣に打たれて、やゝ久しく納骨祠畔に佇む。血を吐く瀕死のもがきは、やがて蒼ざめた死の黄昏に移つた。外套の襟を立てゝも、ぞくぞくする程空氣は冷えて來た。でも、まだ去りもやらずそこに佇む。背後にものゝけはひがする。牽かれるやうに振りかへる眼を、ばつと天來の光が射る。表忠塔が光り出したのである。

「あゝ光が。」

ほつと息をついて、塔を見上げた。二百十五尺の白塔の上、ぐるりについた電燈は、白い光の環をなして中空高く瞬きつゝ、地よ望め、海よ仰げと、黄昏の空に耀いて居る。その光はそも何を宣るか。「不死」でなくてはならぬ。

「不死」

白骨よ、眠れ。大地よ、黙せ。光は死なぬ。死なぬものが光る。光は最後の勝利者である。

いさゝか慰められて納骨祠に別れて旅宿に歸つた。

（死の蔭に據る）

二六 梅

藤岡作太郎

藤岡作太郎  
東國と號す。  
國文學者。  
文學博士。  
東京帝國大學  
文科大學助教  
授。  
明治四十三年  
歿す、年四十  
一。

固陰同、閉ヤラを陰に陰元を寒下 沍寒、草木なほ凍枯せる時、雪肌玉骨ひとり高く重標高直上を標ナ美シイ骨相ヲ見セリ 標致す同、高ヲ表示フるものは梅花にして、菊花の行く秋に後れて凋むと共に高節遙かに群芳を抜く。牡丹は貴客、梅は隠士。彼は金屏を廻らし七寶の花瓶に挿みて見るべく、此は茅舍竹籬牛の聲茅屋、籬ニする邊に尋ぬべし。華麗は櫻花に及ばざれども、芳馨は薔薇に比して別に特長あり。冷艶玉を綴つて疎々たり。老幹龍を横たへて折リマカッテ居ル 偃蹇たり。清風雅韻百花の魁たるもの、この花を措いて何かある。支那の文人は酷だ梅花を好めり。三國の末陸凱といへる人これを江北の友に贈つて曰く、



生田の森  
今神戸市の中  
にあり。

荻生惣右衛門  
門  
徂徠と號す。  
江戸の儒者。  
享保十三年(二  
六)歿す年六  
十三。

傳へていふ、前九年の役安倍宗任捕虜となりて京師に入れ  
るに卿相雲客、奥の夷のさこそ無骨なるらめ、いざ戯れて笑  
はん。とて一枝の梅を示して、これは何ぞと問ふ。宗任とり  
あへず、

我が國の梅の花とは見つれども、

大宮人はなにといふらん。

と答へたるに一座しらけて恥入りぬとなり。源平の亂、生  
田の森にて梶原景季片岡の梅の盛なるを手折り、籠にさし  
て奮戦せるに、花は風に吹かれて鎧の上に散れるを、敵も味  
方もやさしき<sup>上はトキ、下はトキ</sup>武士の振舞かなと感じけりとかや。  
梅<sup>梅ノ香、ヤツリルカ</sup>が香や、隣は荻生惣右衛門。

其角

覆本氏。  
江戸の俳人。  
寶永四年(三三  
七)歿す年四十  
七。

嵐雪

服部氏。  
江戸の俳人。  
寶永四年(三三  
七)歿す年五十  
四。

烈公

徳川齊昭。  
水戸藩主。  
勤王家。  
萬延元年(三三  
一)歿す年六十  
一。

齋藤拙堂

名は正謙。  
伊勢の漢學  
者。  
慶應元年(三三  
一)歿す年六十  
九。

とは、元祿の頃其角が名聲喧傳せる學者徂徠をその花に喩  
へて賛したるもの。

梅一輪一輪ほどのあたゝかさ。

とは嵐雪が窓前の南枝に日々の春を占へるなり。水戸の  
烈公が梅を種えしより借樂園は今に關東の名園となり、齋  
藤拙堂が記勝に寫されしより、月瀬は櫻の吉野と並べ稱せ  
らるゝに至りぬ。

春寒未だ去らざる時、爐を擁して古人<sup>古人、昔イハ、昔物ヲ讀ムト</sup>を友とすれば、遠寺の  
鐘聲霜に牙ゆ。一陣の暗香に驚いて顧みれば、見得たり瓶  
中の芳姿。これ晝間の散策に竹外の一枝を手折りもて來  
し家<sup>家</sup>づとなりけり。(東圃遺稿)



島崎藤村  
名は春樹。  
詩人、小説家。  
明治五年生。

二七 鶯

島崎藤村

さはれ空しきさへづりは、  
雀の群にまかせて、  
うたふをきけや、鶯の、  
すぎこし方の思出を、  
はじめて谷を出でし時、  
北風さむく、霰降り、  
うち望はあふるれど、  
行くへは雲に隠れてき。

大層難本ヲテアガ

自分、春樹、ハ、多ク、望、ム、レ、ド、

居、テ、

露は緑の羽を閉ぢ、

緑、羽、エ、ニ、ハ

霜は翅の花となる。

朝、早、ク、カ、ラ、

あしたに野邊の雪を噛み、  
ゆふべに谷の水を飲む。

日、々、ハ、鬼、ヲ、オ、ク、ラ、ニ、テ、

さむさに爪もこほりはて、

命、ガ、ク、ラ、ム、ト、絶、エ、ソ、ウ、ナ

絶えなんとする度ごとに、

夫、取、リ、又、落、ト、

また新なる世にいでて、  
くしきいのちに歸りけり。

非、常、ニ、心、苦、シ、ク、シ、テ、

主丹柳を 片糸  
よりて 簾の  
めしつゝ 小いまは  
梅の 花さそ

あゝ、枯菊に 枕して、  
冬のなげきを 知らざらば、  
誰が身にとめん ふう風に、  
にほひ亂るゝ 梅が香を

谷間の 笹の葉を 分けて、  
凍れる 露を 飲まざらば、  
誰が身にしめん、白雪の  
下に 萌え立つ 若草を

げに 春の日の のどけさは、

暗くて 過ぎし 冬の日を

思ひし のべる 時にこそ、  
いや 楽しくもある べけれ。

梅のこそめ の花笠を  
かさしつ、酔ひつ、歌ひつゝ、  
さらば 春風 吹き来る

香の國に 飛びて 遊ばん。

二八 村上義光

さる程に、搦手の兵、思ひも 寄らず 勝手の明神の前より 押寄

二八 村上義光

花笠  
鶯の笠に纏ふ  
てふ梅の花、  
折りてかざさ  
ん老かくるや  
と。古今集。

さる程に  
後醍醐天皇元  
弘三年閏二月  
朔。

勝手の明神  
大和國吉野郡  
吉野山藏王堂  
の奥の方にあ  
り。

藏王堂

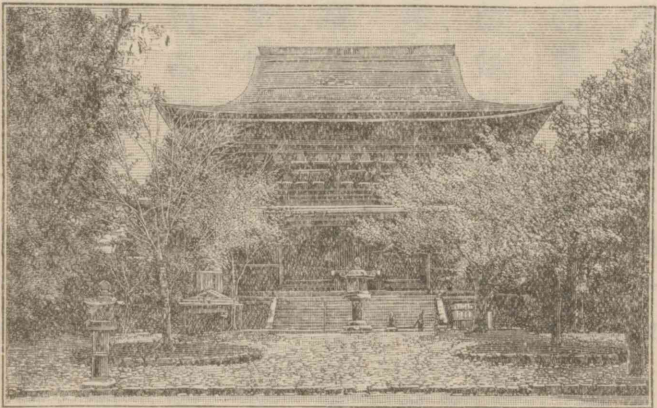
吉野山にあり  
藏王権現を安置す。

せて、宮の御座ありける藏王堂へ打つて懸りける間、大塔宮、  
「今は遁れぬ處なり。」と思召し切つて、赤地の錦の鎧直垂に、緋  
緘の鎧のまだ巳の刻なるを透間もなく召され龍頭の兜の  
緒をしめ、三尺五寸の小長刀を脇に挟み、劣らぬ兵二十餘人、  
前後左右に立ち、敵のむらがつて控へたる中へ走り懸り、東  
西を拂ひ、南北へ追廻し、黒煙を立て、斬つて廻らせ給ふに、寄  
手大勢なりと雖も、僅かの小勢に斬立てられ、木の葉の風に  
散るが如く、四方の谷へ颯とひく。

敵引けば、宮は藏王堂の大庭に並居させ給ひて、大幕打揚  
て最後の御酒宴あり。宮の御鎧に立つ所の矢七筋、御頬さ  
き、二の御腕、二箇所突かれさせ給ひて、血の流るゝこと瀧の

如し。然れども、立つたる矢をも抜きたまはず、流るゝ血を

天帝  
帝釋天王。  
鴻門  
支那陝西省西  
安府にあり。  
項伯  
項羽の季父。  
項莊  
項羽の従弟。



藏王堂樓門

る有様は、漢楚の鴻門に會せし時、楚の項伯と項莊とが劍を

も拭ひ給はず、敷皮の上に立ちな  
がら、大盃三度傾けさせ給へば、木  
寺相模、四尺三寸の太刀の鋒に敵  
の首をさし貫いて、宮の御前に畏  
り、戈鋌、劍戟を降らす事、電光の如  
くなり、磐石岩を飛ばす事、春の雨  
に相同じ。然りと雖も、天帝の  
身には近づかぬ、修羅かたが爲に  
破らるゝとは、やしを揚げて舞ひた

樊噲 漢の高祖劉邦  
と同郷の人、  
鴻門の會、項  
羽を責めて高  
祖の危きを救  
ふ。

抜いて舞ひしに、樊噲庭に立ちながら、帷幕をかゝげて項王を睨みし勢も、かくやと覺ゆるばかりなり。

大手の合戦急なりと覺えて、敵味方の鬨の聲相交りて聞えけるが、げにも其の戦に自ら相當ること多かりけりと見え

て、村上彦四郎義光、鎧に立つ所の矢十六筋、枯野にのこる冬

草の風に伏したる如くに折りかけて、宮の御前に參つて申

しけるは、追手の一の城戸いふがひなく攻破られつる間、二

の城戸に支へて數刻相戦ひ候ひつる處に、御所中の御酒宴

の聲、すさまじく聞え候ひつるについて參つて候。敵既に

かさ<sup>勢</sup>に取上げて、味方の氣の疲れ候ひぬれば、この城にて功

を立てん事今は叶はじと覺え候。未だ敵の勢を餘所へ廻

し候はぬ前に、一方より打破つて、一先落ちて御覽あるべし

と存じ候。但し後に残り留つて戦ふ兵無くば、御所の落ち

させ給ふものなりと心得て、敵いづくまでも續きて追懸け

參らせんと覺え候へば、恐ある事にて候へども、召されて候

錦の御鎧直垂と、御物具とを下し賜つて、御諱の字を冒して

敵を欺き、御命に代り進らせ候はん。と申しければ、宮いかに

かさる事あるべき。死なば一所にてこそとも、かくもなら

ぬ。と仰せられけるを、義光詞を荒らかにして、かゝる淺まし

き御事や候。漢の高祖、滎陽に圍まれし時、紀信、高祖の眞似

をして楚を欺かんと請ひしをば、高祖之を許し給ひ候はず

や。斯程にいふがひ無き御所存にて、天下の大事を思召し

し候はぬ前に、一方より打破つて、一先落ちて御覽あるべし

と存じ候。但し後に残り留つて戦ふ兵無くば、御所の落ち

滎陽 支那河南省鄭  
州にあり。  
紀信 高祖項羽に圍  
まれし時、高  
祖と説りて死  
し、高祖の危  
を脱せしむ。

立ちける事こそ、（案外事アリ）うたてけれ。はや、其の御物具を脱がせ給ひ候へ。」と申して、御鎧の上帯を解き奉れば、宮（ソウ）げにもとや思



（筆齋容池菊） 光 義 上 村

召しけん、御物具・鎧直垂まで脱ぎ替へさせて、「我若し生きたらば、汝が後世を弔ふべし。共に敵の手に罹らば、冥途までも同じ岐に伴

ふべし。」と仰せられて、御涙を流させ給ひながら、勝手の明神の御前を南へ向つて落ちさせたまへば、義光は二（二）の城戸の

高櫓に登り、遙かに見送り奉り、宮の御後影のかすかに隔らせ給ひぬるを見て、今はかうと思ひければ、櫓（先守ラッ）の狭間の板を切落し、身をあらはにして、大音聲を揚げて名のりけるは、「天照大神の御子孫神武天皇より九十五代の帝後醍醐天皇の第二皇子一品兵部卿親王尊雲、逆臣のために滅ぼされ、恨を泉下に報ぜんために、只今自害する有様見置きて、汝等の武運忽ち盡きて腹を切らんとする時の手本にせよ。」と言ふまに、鎧を脱ぎて櫓より下へ投落し、錦の鎧直垂の袴ばかりに、練貫（ネリクワン）の二小袖を押膚脱いで、白く清げなる膚に刀を突立て、左の脇より右のそば腹まで一文字に掻切つて、腸つかんで櫓の板に投げつけ、太刀を口にくはへて、うつぶしに成り

天の川

大和國吉野郡の奥の地。十津川の上流天の川に沿へる部落

てぞ伏したりける。  
追手、搦手の寄手を見て、サアすはや、大塔宮の御自害あるは、われさきに御首たまはらん。とて、四方の圍を解きて一所に集る。其の間に、宮は其ノ反對ニひきたがへて、天の川へぞ落ちさせ給ひける。(太平記)

村上浪六

名は僧。小説家。明治元年生。

二九 殿中の刃傷

村上浪六

元祿十四年、三月十四日、白書院に將軍勅旨奉答の式日、閣老有司の面々は素より、譜代外様あらゆる諸侯の總登城は巳の上刻。將軍の陣屋千代田の春に武家の莊嚴を極め、關東の勢柳營の威儀、廣々たる殿中今日を晴と出仕の席に従ひ順に就いて、

吉良上野介

名は義央。高家の筆頭。

淺野内匠頭

名は長矩。播磨國赤穂城主。

勅使院使の御登營をいまか〜と待ちうけぬ。別けて今日は公武周旋の典禮作法に出頭第一の老功たる吉良上野介、松の御廊下口を控へし一室の正面に着座して、我なくばと四方見廻す體。鬼畜に總身の肉を食まるゝ如き心地しながらも、遁るゝ道なき淺野内匠頭、恐るゝ其の前に迂り出づれば、じろりと見て、

「ほゝう、昨日の問合に、長は無用。」と申した上野の一言、今日許は神妙に守られて、烏帽子・大紋を召されたな。萬事その通りに致さるれば、此の程より度々の御失體もない筈ぢやに。」

「お言葉謹んで有難く承ります。就きまして内匠なほ一應差當り御指圖を。」

「何、差當つての指圖、如何様の儀で御座るの。」

「今日の御儀式に、傳奏方御着のみぎり、内匠の御役目として、お玄關の式臺に御迎へ申上げませうや、たゞしは御式臺下にて御迎へ申上げませうや、御指圖を下さりまするやう。」

上野介イッスさも訝しげの顔色、

「是は以ての外怪しからぬ。内匠殿、お場所柄も辨へず、今日この老人を愚弄せらるゝか。」

餘りの案外に、内匠頭はつと驚きの面をあぐれば、其の面上

傳奏  
傳奏柳原權大  
納言資康等勅  
使として下向  
す。

に冷笑ひの聲を含みて浴せかけ、

「此の上野を愚弄するでなく、若し眞實この場合に差迫つて、左程の事も御存じないとすれば、上を欺いて今回の大役を申受けられたも同然、指圖も指南も事に依りけり。」

五萬三千石の大名、それで御用がつとまると思はるゝか、疎忽千萬。」

さらでも堪へ難き連日の遺恨に、夜の目も合はず無念の涙を呑み、只さへ忍び難き鬱憤に、頬は瘦せ顔は蒼ざめながら、重ねくの恥辱も御奉公大切の一念に、元來の癩癬、短氣を抑へ來りしに、今又五萬三千石の祿盜人と言はんばかりに辱められし内匠頭、その儘伏して座を動かねど、びたりと支

桂昌院  
本莊宗子  
徳川家光に事  
へ家綱を生

へし兩手は我を忘れて拳を握り、頭を垂れし烏帽子は次第に打震ひ、鷹の羽の大紋は袖に漣を寄するが如し。さもこそと心地よげに座を起ちし上野介。

折しも將軍家の生母たる桂昌院の御使番として、大奥より急ぎ足に來りし梶川與三兵衛、かくとは知らず内匠頭に向つて御用の打合せ。

「これは幸ひ淺野殿、上様御勅答の御儀式相濟みましたる節は、其の旨此の梶川までお知らせ下されまするやう。」  
松の廊下を三四間の彼方まで走りし上野介、俄に振返りて立戻りぬ。

「梶川殿、何の御用かは存せぬが、桂昌院様よりとあれば、上

野承らう。そこに居られる内匠殿では、作法萬端一向お分りにならぬ御人、心元ない。ありや近頃若毫碌せられ

たげぢや。」

伏したる内匠頭、むつくと起上るや否、大原實盛の小さ刀を抜く手も見せず、電光石火の勢、帛を裂くが如き癩癥の一聲、

「おのれつ。」

躍りかゝつて上野の面上眞二つと打込みしが、餘りの悲憤に氣は焦りて拳は伸びたり。恨の切先は流れて、がちりと烏帽子の鐵輪。「無念」と踏みこんで、仆れし上を二の太刀に斬下げしうしろより、梶川與三兵衛むざと羽騒攻に組付きぬ。

自由  
手  
振

年  
若  
毫  
碌  
せ  
ら  
れ



「お場所柄で御座るぞ。 亂心亂心。」

内匠頭遁げゆく敵に血眼を注いで、さながら五臟六腑を絞喉底より絞るり出す聲。

「らら、亂心致さぬ。 武士の御情、お慈悲、お慈悲つ。」

如何に荒狂うて振放さんとするも、如何に藻掻いて追はんとするも、梶川與三兵衛は八萬騎中に聞えたる六尺有餘の大力無雙。 あはれ、内匠頭は元來の瘦形に、連日連夜の疲れ果てし身。 見すく眼前に長蛇は逸せりハシバシバ上野介の北に逃げ。 殿中は鼎の沸くが如く、上を下への大騒動。

間一髪、吉良上野介は危き命を拾うて、駈付けし品川豊後守儀司事司の控場所に助けられ、お坊主の肩に掛けられて、高家衆の詰所へ連れ

こまれしが、日比の權威、傲慢に似合はず、息も絶えどくなる老眼に血を浴びて連れゆかるゝ時、「お典醫、お典醫」と聲を顫はせながら夢中に唸りし體、餘りの見苦しさと小氣味よさとに、出逢ひし諸侯何れも微笑を含みぬ。

武運の末、後より梶川與三兵衛の大力に抱きとめられ、前より坊主の關久和に太刀の手を搦まれて、斯くまでの鬱憤も無念も萬事こゝに休せし内匠頭、其の儘御目付の天野傳四郎傳四郎は、お坊主のと曾根五郎兵衛とに護られ、蘇鐵蘇鐵は、お坊主のの間に引かれて、杉戸の後に据ゑられしが、靜かに鬢の毛を撫上げ衣紋を繕ひし體、「流石に名家の生れなり。」とて、見るもの思はず涙を催しぬ。

(元四十七士)

田山花袋  
名は録彌。  
文學者。  
明治四年生。

三〇 松島

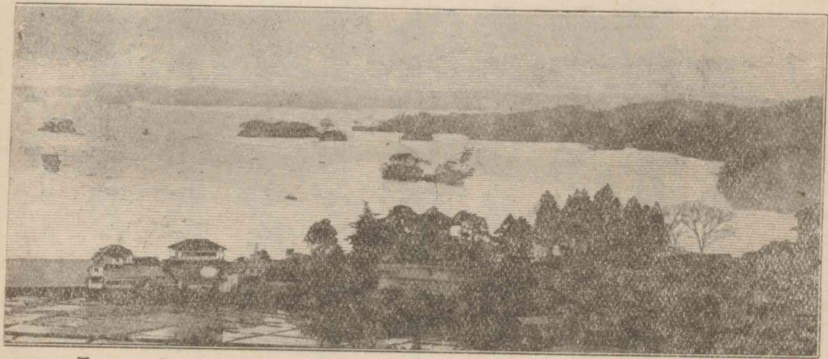
田山花袋

鹽竈の町は半ばは港で、半ばは漁市である。大漁模様のど  
てらを着た漁夫が往來して居る。鹽竈の昔の竈、それから  
長いく、石階、神社の境内は綺麗に掃除が届いて居て、參詣  
の女達は蠟燭の燃え残りを社務所で買つてゐる。  
深く入込んだ入江、そこに集つてゐる帆檣や和船や荷足や  
水脈は深く黒く流れて、潮は岸の旅舎の影を靜かに揺かす。  
そこに松島遊覽のベンキ塗の小蒸氣船が沖から淡い煙を  
靡かして入つて来る。酒を載せた小舟がたぶくと日に  
照されて沖へ出て行く。石垣の上には長い竿を水に垂れ

て魚を釣つてゐるものなどがある。小さな蟹や舟蟲は磯  
を這つて居る。

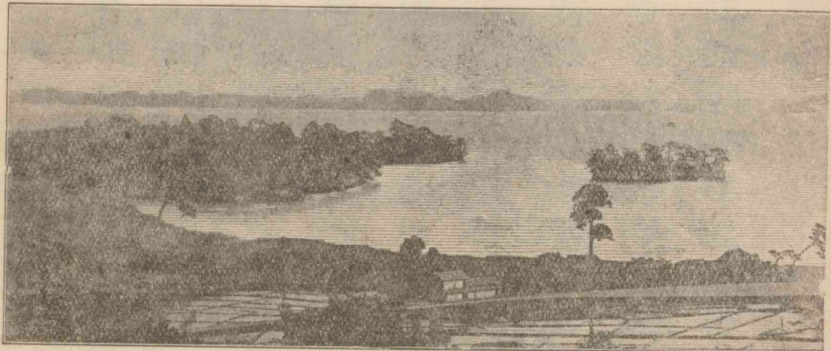
波が次第に高くなつて來た。少し沖に出ると、あゝ金華山。  
誰も彼も聲を揚げた。大きな水門の彼方に碧く鮮かに金  
華山は指さされる。大洋に出て行く帆は斜に敲いて、兩方  
から追つた瀬戸の岸の山影がさながら入江を扼してゐる  
やうに見える。白い波頭の立つのが處々に眺められる。  
八百八島は次第に現はれて來る。

松島灣の水深は極めて浅い。最早老衰した入江である。  
琵琶湖や霞ヶ浦と均しく、遠からず陸地になり、水田になつ  
て了ふであらう。しかし流石に區域が廣いので、琵琶湖の



富山よりの見

やうに水が錆びてみない。處によつては深い大海と同じ碧を見ることが出来る。潤い複雑した變化ある氣分を受けることが出来る。しかしこれを橋立の外海の海の色と比べると、その生氣あり變化ある色彩は一籌を輸さなければならぬ。あの碧あゝの四面を取巻いた山、深い嵐氣あゝいふものはこの松島には求めることが出来ない。従つて水蒸氣の少い空氣の乾いた日には、山も島も皆わ



たの松島

るく白ちやけて見える。島の松が赤ちやけてゐるのも佗しいやうな氣がした。海の碧が空の碧のために全く塗り消されて了つてゐる。あたりに高い山嶺のないといふことは松島の空氣を尠からず單調ならしめる。私は三度松島に遊んだ。その中で最近に行つた時が一番水蒸氣の多い時であつた。「こんなに綺麗に見える事もあるのか」と私は思つた。私は五大堂と相對した大きな旅舎の三階の一

間から、蒲團の中にくるまりながら朝の鮮かな静かな景色を眺めることが出来た。薄い霧の中から、日のまだ上らない曉の薄い被衣（被衣）のやうな霧の中から、一つく島が現れて来るさまは何とも言はれない。

静かだ、いかにも静かだ。時は春先の三月の末で、どてらを重ねて着ても、まだ寒い位であつた。前には名物の實竹の澤山に生えてゐる島があつて、その向ふに大きな島が黒く碧く浮んで居るが、そこに最初の朝日の光が先づさして、見てみるとそれが段々霧の中に美しいかゝやきを展げて、今まで見えなかつた島の影が其處にも此處にも見え出して来る。私は立つて眺め盡した。この眺望を更に一層大き

くしたのが新富山の眺望で、更に又それを大きく廣くしたのが富山の眺望である。觀瀾亭は伊達政宗が太閤の伏見城の一室を頂戴してそれで造つた瀟洒な亭だが、そこから見た眺は旅舎の三階で眺めたよりも、もつと漁村らしい感じを持つてゐて、岸と汀線と松と島との調和がいかにもよく一致してゐる。

富山の上の大仰寺の庭から眺めた形は、橋立を笠松から眺めた形に似てゐる。松島を平凡だと言ふ人もこゝへ來ると、皆驚いて兜を脱いで了ふのが例だ。實際其處から見た規模は大きい。此處ではもう島を眺めるのではない、八百八島を持つた美しい海を眺めるのである。その四周を取



の貫徹する時機が来て、これまで敵視して居た人の中にも互に肝膽を吐露しあふほどの知己が出来たものだ。區々（作カセ内）ホメニケラシクハリニリケルニハルハたる世間の毀譽褒貶を氣にするやうでは到底仕方がない。

以辰三月官軍と鋒至品川十日と鋒至謀  
て侵野の令あり同日十日と鋒至謀  
送る一息以希ふ余高崎薩摩の郎子到

(帖友亡) 蹟筆舟海勝

そこに行くくと、西郷南洲などはどれ程大きかつたか分らぬ高輪の一談判で自分の意見を容れたばかりでなく、江戸全市鎮撫の大任まで一切自分に任せて少しも疑はぬ。昨日まで敵身方であつたといふことは何處へか忘れてしまつ

筆蹟

尊翰拜誦仕候  
陳は只今田町  
迄御來駕被成  
下候段爲御知  
被下早速罷出  
候儀可仕候間  
何卒御待居被  
下度此旨御受  
迄如此御座候  
頓首  
二月十四日  
西郷吉之助  
安房守様  
拜復

早細ね情を  
時を田町迄御來駕  
ふらりたわの  
お色をさる御二作  
のち口行れりお茶  
お茶のしめを望ま  
三月十四日  
安房守様  
西郷吉之助

(帖友亡) 翰書洲南郷西

たやうだ。其の度胸の大きいことには自分もほとほと感心した。官軍が品川まで押寄せて来て、いまにも江戸城へ攻入らうとする際に、西郷は自分が出した唯一本の手紙で、芝、田町の薩摩屋敷までその談判にやつて来た。當日、自分は羽織袴で馬に騎つて、従者を一人連れたのみで出掛けた。まづ一室へ案内

されて暫く待つて居ると、西郷は庭の方から、古洋服に薩摩風の下駄をはいて、例の熊次郎といふ忠僕を従へ、平氣な顔で出て來た。「これは遅刻しまして誠に失禮。」と挨拶をしながら座敷に通つた。其の様子はすこしも一大事を眼前に控へたものとは思はれなかつた。さて愈談判になると、西郷は自分のいふことを一々信用してくれ、其の間に一點の疑念をも挟まない。「色々むづかしい議論もありませうが、私は一身にかけて御引受します」とかういふのだ。西郷のこの一言で江戸百萬の生人靈もその生命と財産とを保つことが出來、徳川氏も亦その社稷を保つことを得たのだ。若しこれが他人であつたら、いや、貴様のいふ事は自家撞着だ。

とか、「言行不一致だ。」とか、澤山の暴徒があゝの通り處々に屯集

して居るのに、恭順の實が何處にある。」とか、色々喧しく責立てるに違ない。さうなると談判は忽ち破裂だ。併し西郷

は流石にそんな野暮はいはない。よく大局を達觀する明

と大事に處する斷とをもつてゐた。

談判がまだ始らないうちから、桐野などといふ豪傑連は、大勢次の間へ來て竊に様子を覗つて居る。薩摩屋敷の近傍には官軍の兵隊がひしひしと詰めかけて居る。實に殺氣陰々として、物凄い程であつた。然るに西郷は泰然としてあたりの光景は少しも眼に入らぬものゝごとく、談判を終へてから、自分を門の外まで見送つた。自分が門を出ると、

近傍の街々に屯集して居た兵隊はどつと一時に押寄せて  
來たが、自分が西郷に送られて立つて居るのを見て、一同恭  
しく捧銃の敬禮を行つた。

此の時、自分が殊に感心したのは、西郷が自分に對して幕府  
の重臣たるだけの敬禮を失はず、談判の時にも始終座を正  
して、手を膝の上に載せ、少しも敗軍の將を遇するといふや  
うな風が見えなかつたことだ。その度量てんりやうの大きいことは、  
いはゆる天空海濶てんこうかいくわくで、見識けんしきぶるなどいふことは、固より少し  
もなかつた。知識の點に於ては或事柄は自分の方が上で、  
外國の事情などは却て自分が話して聞かせた位だつたが、  
その氣膽きだんの大きいことに至つては、絶倫と謂ふべく、議論も

何もあつたものではなかつた。(永川清話)

三三 南洲遺訓

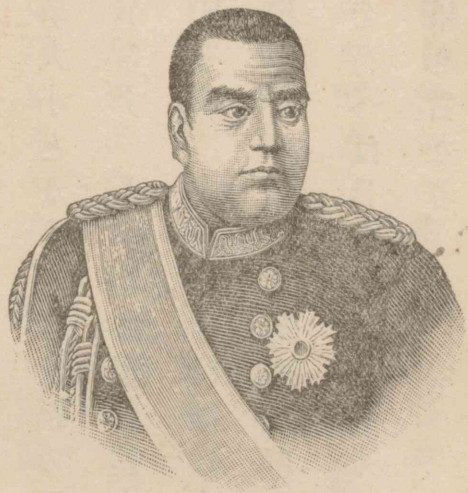
西郷南洲

事大小となく正道を踏み、至誠を推し、一事の詐謀ごうめいを用ふべ  
からず。人多くは事の差支さしつかへふる時に臨み、策略を用ひて、一  
旦その差支を通せば、後は事宜次第工夫じぎふの出来る様に思へ  
ども、策略の煩吃はんじつ度生じ、事必ず敗るゝ者ぞ。正道を以て之  
を行へば、目前には迂遠きうえんなる様なれども、先に行けば、成功は  
早き者なり。  
人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を盡  
し、人を咎めず我が誠の足らざるを尋ぬべし。



己を愛するは善からぬことの第一なり。修業の出来ぬも、  
事の成らぬも、過を改むることの出来ぬも、功に伐り驕慢の

生ずるも、皆自ら愛するがた  
めなれば、決して己を愛すま  
じきものなり。



西郷隆盛

過を改むるに自ら過てりと  
思ひつかば、それにてよし、そ  
の事をば棄て、顧みず直ち  
に一步踏出すべし。過をくやくしく思ひ、取繕はんとて心配  
するは、茶碗を割り、その缺を集め、合せ見ると同じ事にて詮  
なき事なり。

命もいらす名もいらす、官位も金もいらぬ人は始末に困る  
ものなり。この始末に困る人ならでは艱難を共にして國  
家の大業は成し得られぬなり。

道を行ふ者は天下舉つて毀るも足らずとせず、天下舉つて  
譽むるも足れりとせず。自ら信ずるの篤きが故なり。

天下後世までも信仰悦服せらるゝものは只是一箇の誠な  
り。古より父の仇を討ちし人その數擧げて數へ難き中に、  
獨り曾我兄弟のみ今に至るまで兒童婦女子までも知らざ  
る者のあらざるは、衆に秀でて誠の篤き故なり。誠ならず  
して譽めらるゝは僥倖の譽なり。誠篤ければ、たとひ當時  
知る人なくとも後世必ず知己ある者なり。  
(日本陽明學派の哲學)

尾崎行雄

傳堂と號す。  
政治家。  
嘗て東京市長  
文部大臣・司  
法大臣たり。  
安政六年(三)  
年生。

三三 西郷南洲論 その一

尾崎行雄

有史以來時を閱する幾千載所謂英雄豪傑も亦多し。或は  
名言德行を以て勝り、或は鴻業偉勳を以て勝る。而して皆  
能く多少の聲望を當世に繋ぎ、渴仰を後昆に得ざるは無し。  
而して其の聲望渴仰の深淺大小を較ぶるに、亦多く言行事  
業の大小深淺に伴ふものあるが如し。獨り吾が西郷南洲  
に至つては、古來の英豪と全く選を殊にし、德望の隆洽なる  
こと遠く其の言行事業の上に出づるを見る。  
南洲の言行欽すべからざるに非ず、事業慕ふ可からざるに  
あらず。但其の言行事業は未だ彼が如き德望を博するに  
値せざるを思ふ。我此の疑問を懷いて左思右考するもの

多年之を先輩に質し、之を史籍に稽へ、種々の方面より解釋  
を試みて遂に獲る所なし。竊に以て憾となす。然るに偶  
然の感興は一朝にして倏ち多年の疑問を氷解せり。  
會て東京市立養育院を巡視す。收容する所は皆是貧苦に  
して自立すること能はざる者に係るといへども、熟其の狀  
貌を視るに、富貴の相を具へて爾く貧困なるべからざるも  
の間、之あり。之を當局者に諮るに、果然彼等の中には高等  
官の職に在りし者あり、巨萬の富を擁せし者あり。  
然るに不期の變に遇ふに方りて直ちに養育院中の人とな  
るは榮枯の變化亦激しからずや。人各親屬あり、故舊あり、  
艱難相濟ひ、變災相弔して、容易く凍餒の甚だしきに至らず。

此の輩にして獨り艱難を濟ひ、變災を弔する親屬故舊なしといふは頗る奇とすべし。是に於てか思へらく、「墮落此の極に及ぶものは、其の身に固有の性癖ありて自ら不幸を招致するにあらざるなきを得んや」と。乃ち卒然として當局者に問うて曰く、「入院者一般に通ずる特質と稱すべきものあらんか。若しこれあらば願はくは與り聞くを得ん」と。余は卒然として疑問を發したりといへども、翻つて又思へらく、「是蓋し深慮を要すべき大問題なり。當局者の經驗に豊なるを以てすとも、或は直ちに答へ難からん」と。而も當局者は聲に應じて對へて曰く、「然り、洵にこれあり。他人に對して同情を缺き、毫も自ら抑制すること能はざるもの、即

ち一般に通ずる性癖なり」と。余は其の應答の甚だ速なるに驚くと共に、一種の感興は油然として湧けり。而して之と同時に回憶したるものを西郷南洲とす。身高等官の位置に在りといへども、家に巨萬の富を擁すといへども、苟も他人に對して同情を缺き、獻身の熱誠なくんば、他人亦白眼を以て我を視る、一朝蹉跌に遭ひて凍餒するも亦顧みるものなき所以なり。畢竟社會は同情の交換を以て成る。知るべし、善惡の因、慶殃の果、應報の違はざること影の形に隨ふが如きものあるを。社會は同情の交換を以て成立する所以を解し、同情を缺く者の遂に他の同情を買ふ能はざるを知らば、其の裏面に於て徳望の歸する、亦由

つて來る所あるを推すべし。而して南洲の面目始めて髣髴たるを得るに庶幾からんか。

三四 西郷南洲論 その二

尾崎行雄

甲東  
大久保利通

之を維新の諸豪に觀るに、南洲の果斷明決は甲東に如かず、

謀慮周密は松菊に如かず、若しそれ學藝才辯に至つては藤

松菊

木戸孝允

藤

伊藤博文

隈

大隈重信

隈二君に如かざること遠かるべし。而も挺然として群を

抜き、望を負ふこと、猶衆星の北斗に共ふが如きものありし

は何ぞや。

征韓の議破れて急流を勇退し、孤馬に鞭ちて帝都を去るも

毫も怨嗟の風なく、悠々たる魔城の天犬を逐ひ、兎を獵して

丁丑  
明治十年

閑適自ら遣る。此の間誰か叛心を藏すといはん。若し眞

に叛せんと欲せば、前に前原の變あり、江藤の亂あり、丁丑の

歳を待たずして乗すべきの好機に乏しからず。況や重望

彼が如きを以てして、干戈の外に施すべき好機方策なしと

いはんや。今に及ぶまで彼が叛跡を云々するは、未だ以て

英雄の心事を解する者にあらず。

彼固より行路の人に忍びざる情あり。況や多年艱苦を共

にし、水火に出入し、愛子友弟に等しき配下に對するに於て

をや。丁丑の死は即ち彼が是等の配下に捧げたる犠牲の

み。世或は月照の死に對して西郷を議するものありと雖

も、我を以て之を見るに、唯其の踰天躋地の志士を憐む情に

勝へず、之を救ふ道なきがため、自ら亦死を決して共に海に投じたるに過ぎず。漫りに揣摩臆測を逞しうして、種々の言議を挟むが如きは、英雄を以て兒女の情なしとするの妄に坐す。恭謙士に下る王莽も、或は以て一時の隆譽を博し得べし。人心の歸服を得んとして恩を施し惠を加へ、強ひて笑を賣る者は、現に吾人の目撃する所、而して遂に南洲の萬一を庶幾すること能はざるは、多く人工の假作に出でて性情の自然に基づかざればなり。塗粉は久しからずして剝落す、人工の假作は永く本來の面目を蔽ふ事を得んや。情熾なる時は智力或は其の作用を鈍うす。一度動いて同情の念に驅らるれば、天下の大事に關する軀を遺れて一故

舊の爲に死を決し、百二都城士族の子弟に擁せられて、千載叛賊の名に甘んず。大局の打算を誤るを笑ふ勿れ、兒女の情に同じきを嘲る勿れ。南洲の南洲たる所以是に在りて、而して人の偉大なる所以亦實に是に存す。一々利益を計較し、得失を打算し、自我を立つるに専らならば、他人亦此の如くにして我に對せん。其の自ら衣食する能はざるに及んで、直ちに養育院中の人となる、亦怪しむに足らず。己を無みし、軀を捐て、他人の爲に同情せば、學問才藝の取るに足るものなくとも、猶能く衆心を得るに足らん。畢竟人望は同情の反射なり。我より注ぐ者を同情といひ、他より返る者を人望といふ。もとこれ一物にして、二

あるに非ず。偉大ならんことを欲せば、先づ其の仁心を修養するを要す。人の冷酷を怨み、世の澆季を歎じて、其の極社會の組織を非議する者は、恐らくは自ら省察するを急とすべし。我一日養育院に臨んで、偶然感興を催し、延いて南洲に關する多年の疑問を氷解し得たりと信ずるが故に記して少年子弟研鑽の料に資す。（讀賣新聞）

師範學校 國文教科書 本科用 卷二 終

師範學校 國文教科書 本科用 卷二 附錄

第二篇 漢字

一 漢字の起原

漢字の起原には象形・指事・會意・諧聲の四つの形式あり。更にその用途を廣むるに轉注・假借の二つの形式あり。之を合せて六書とす。六書は漢字の構造及び使用を説明する分類法なり。

象形 有形の物體の形に象りて作れる漢字を象形といふ。

- |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 日 | 月 | 山 | 水 | 木 | 艸 | 魚 | 鳥 | 弓 | 刀 |
| ○ | 夕 | ⌒ | 川 | 木 | 艸 | 魚 | 鳥 | 弓 | 刀 |

指事

象形は漢字の最も原始的なるものなり。象形の漢字はその數多からず、凡そ六百餘字なりといふ。蓋し有形の物體は多けれど、其の微細なる差別は到底象形文字を以て之を表はし得べからざれば象形文字は割合に少きなり。

指事 無形の事柄を形に託して指し示せる漢字を指事といふ。

一 二 上 下 末 本

指事の漢字はその數最も少なく、凡そ百餘字に過ぎず、是の製作の工夫容易ならざればなるべし。

象形指事は漢字の單元にしてその單純なる形なり。之を字と區別しては文といふことあり。

會意 二箇以上の既成文字を連ねて一字となし、もとの意を會合して新に一義をなせる漢字を會意といふ。

林 赫 炎 森

孔孟學好

肉好血

五佳  
天足

吾唯下知代會意

右は同字を二字又は三字連ねたる會意なり。

明 鳴 昧 伐 盥 解

右は異字を二字又は三字連ねたる會意なり。

會意の文字の音は之を組成せる個々の文字の音に拘らず全く異なる音をあらはすものなり。

會意に屬する漢字はその數多からず、凡そ七百餘字なりといふ。

諧聲 二箇以上の既成文字を連ねて一字となし、原字の一は意義を表し、一は音聲を示す漢字を諧聲といふ。

江 河 猫 狗

右は右聲左義の諧聲なり。

鳩 鷄 項 頭

右は左聲右義の諧聲なり。

資 貸 忿 慙

右は上聲下義の諧聲なり。

諧聲

蓮 荷 竿 箭

右は下聲上義の諧聲なり。

圃 園 閣 閨

右は内聲外義の諧聲なり。

衡 輿 問 悶

右は外聲内義の諧聲なり。

諧聲は一半音を表し、一半義を表すが故に、文字を増殖する上に於て最も便利にして且明瞭なるものなり。無形の事柄は勿論、有形の物體にても象形にて表し難き語は多くこの法による。従つて漢字の十分九は諧聲に屬すといふ。

諧聲の義を表す部分を音を表す部分と誤り、又は會意を諧聲と誤り讀む時は發音を濫るべし。俗に之を百姓讀といふ。

會意諧聲は象形又は指事を連合して作れる合字なり。之を文と區別しては字といふことあり。

轉注

象形・指事・會意・諧聲の四法を以て新なる漢字を製作す。而して在來の文字を他義に流用するは轉注・假借の二法によるなり。  
轉注 文字の本義を類似せる他の意義に轉用するを轉注といふ。

美好——好惡      號令——縣令

右は義を轉ずれども音を變ぜざる轉注なり。

音樂——快樂      善惡——好惡

右は義を轉ずると共に音も變ずる轉注なり。

假借 在來の文字の音を假りて、その本義と無關係なる他の意義に用ふるを假借といふ。

俎豆——豆腐      皮革——改革

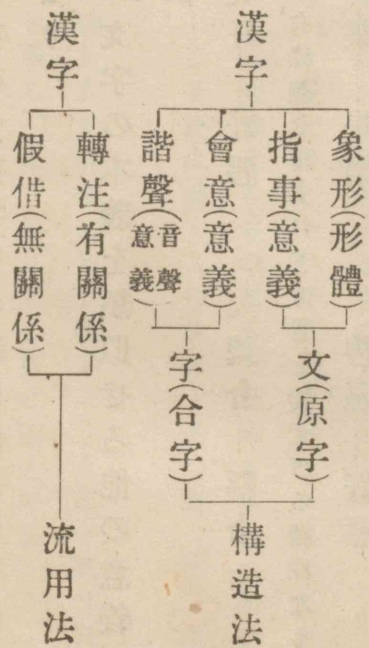
漢字を以て外國語を寫すときは單にその音を表はすのみにて全く意義を

假借



有せざる文字となる。これまた一種の假借といふべし。  
 印度 比丘 奈落 瓦斯 倫敦 華盛頓  
 我が假名の如きも、六書よりいへば一種の假借といふべし。  
 六書の説右の如しと雖も、今日にてはその成立の詳ならざる漢字も固より  
 尠からずとす。

今試に漢字の成立を表示すれば左の如し。



二 漢字の變遷

古文 大篆 小篆 隸書 楷書 行書 草書

漢字の始めて製作せられしより凡そ四千年に及ぶを以て其の間に字體の變遷尠からず。その最も古きは古文なり。そは當時筆紙の發明なく、漆液を以て竹簡に書したるにより、文字の頭圓く大きく、尾細くしてその形蛙の子に似たれば科斗の文字ともいふ。周の世に至りては古文を變じて大篆を作り、秦の世に大篆の繁雜なるを省きて小篆を作る。同じく、秦の世にまた小篆を省略して隸書を作る。小篆は今も印璽碑額等に用ひ、隸書も碑額等に用ふる。ことあり。秦漢以來毛筆及び紙の發明ありしによりその字體も次第に整頓し、後漢の頃より隸書などの筆勢を變化して作り出したる楷行草の三體は、その後遂に常用の字體となりて以て今日に至れるなり。





同字別義

本來は同じ文字なれど、慣用上、用法に限ありて殆ど別字の如くなれるものあり。

箇	條	巖	句	驅	華	邪
所	いはほ	いは	俳	逐	繁	正
一	は	は	讀	馳	美	魔
人	は	は	引	足	鳥	蘇
岩	引	引	出	花	耶	
笑	笑	娘	疎	著	肉	徧
止	令	達	通	顯	牛	あまねし。
笑	娘	疎	著	到	食	
分	疎	精	物	穴	戶	遍
分	遠	着	物	穴	戶	百

轉換同字

漢字にはその扁旁冠脚等の位置を轉換して妨なきものあり、轉換すれば別字となるものあり。而して轉換すれば文字をなさざるもの固より多し。漢字の部分を換置するも妨なきもの左の如し。

轉換別字

正體 鞏 鷲 峨 槩 岷 碁 胷 羣 稟 秋 松 蘇 摸 峯 緜 略 鄰 和  
別體 鞍 鵝 峩 概 崖 棋 胸 群 稿 焮 忝 蕪 摹 峰 綿 畧 隣 味  
漢字の部分を換置すれば別字となるもの左の如し。

數に關する文字

怡	肝	棘	衿	吟	拾	俳	眇	俯	紋	愉	猶
怠	旱	棗	衾	含	拿	悲	省	腐	紊	愈	猷

數の單位をあらはすに用ふる時に限りて別體を用ふも妨なき漢字あり。左の如し。

相似字

正體	圓	貫	錢	町	蓋
別體	円	メ	𠄎	丁	厘

字形の類似せる漢字は讀むにも書くにも正確に區別せざるべからず。

今其の重なるものを左に示す。

易 場 場 場 錫 錫

易 場 湯 楊 揚 陽 颺 腸 暢 傷 觴

干 汗 竿 肝 奸 旱 悍 軒 刊 罕 幹 軒

于 汗 竿 芋 孟 迂

各 陷 陷 韶 焰 詔

各 稻 滔 蹈 韜

求 球 救 喪

朮 忱 述 術

岡 綱 鋼 剛

罔 網 罔

壺 壺

帥 師

且 且 狙 狙 阻 阻 狙 狙 祖 祖 粗 粗 組 組 齟 齟 查

但 坦 担 袒 韌

丞 蒸

亟 極

商 商 摘 滴 嫡 鎬 敵 適

束 刺 喇 辣 賴 瀨 癩 籟 懶 獫 救 速 悚 漱 整

束 刺棘棗策

段 鍛鍛

段 鍛假暇瑕蝦霞遐

奴 怒努孥弩鴛啜

如 恕絮洳

東 棟凍

柬 棟練煉闌瀾爛蘭諫

班 斑

專 專

專 傳搏博縛簿

專 傳搏磚轉團

丰 蚌烽蜂鋒峯逢蓬

巾 降絳

麻 痲摩磨魔靡糜

林 淋霖霖禁焚楚

小 忝添恭慕

水 暴瀑曝爆漆膝泰黍藤黎

右は二字相似たるものなり。

己 紀記杞起忌妃配改

巳 祀熙選撰

母 毒璫

母 貫 貫 實  
母 每 梅 海 悔 晦 誨 敏

右は三字相似たるものなり。

戊 越 越 越

戊 越 越 越

戊 越 越 越

戊 越 越 越

右は四字相似たるものなり。

四 漢字の部首

部首とは漢字を組立つる單元にして之を片旁冠脚等の各部に分つ。漢字の字書は多く部首分類の法を用ふ。

扁

漢字はその數五萬に近しと雖も、今日我が國にて常に用ふるものは五千内外なるべし。而して之をその成立上より分類すれば六書となれども、六書を區別するは容易ならず、又音韻によりて分類する法もあれど、音韻の學に通ぜざればなし難し。部首分類を便とする所以なり。國定尋常小學讀本に用ひたる漢字は千三百六十字なり。都首は二百餘あり。その中普通の名稱あるもの左の如し。扁は漢字の左側にある部首にして、運筆上、筆を着くる初めなり。

人 扁	二 水	小 邑 扁	口 扁	土 扁	女 扁
子 子 扁	山 山 扁	巾 巾 扁	弓 弓 扁	彳 行 人 扁	彡 三 水
心 立 心 扁	手 手 扁	豸 獸 扁	日 日 扁	月 月 扁	月 肉 月
木 木 扁	歹 歹 扁	止 止 扁	火 火 扁	月 將 扁	片 片 扁
牛 牛 扁	王 玉 扁	田 田 扁	目 目 扁	予 矛 扁	矢 矢 扁

旁

石 石扁 示 示扁 禾 禾ノ木扁 立 立扁 夕 夕扁 衤 衣扁  
 米 米扁 糸 糸扁 缶 缶扁 羊 羊扁 未 未扁 耳 耳扁  
 舌 舌扁 舟 舟扁 虫 虫扁 角 角扁 言 言扁 豆 豆扁  
 豸 豸扁 貝 貝扁 足 足扁 身 身扁 車 車扁 酉 酉扁  
 采 ノ米扁 里 里扁 金 金扁 革 革扁 食 食扁 馬 馬扁  
 骨 骨扁 鬲 鬲扁 魚 魚扁 鼻 鼻扁 齒 齒扁 馬 馬扁  
 旁は漢字の右側にある部首にして、筆を止むる處なり。

リ 立刀 卩 節旁 卩 大邑 彡 彡旁 斗 斗升 戈 戈  
 支 支 斤 斤 欠 欠 爻 爻 豆 豆 皮 皮  
 聿 筆旁 貝 小貝 酉 日讀の酉 佳 古鳥 韋 韋 頁 大貝  
 鳥 鳥

冠

脚

垂

遶

冠は漢字の上部をなす部首にして起筆にあり。  
 一 卦算冠 一 冫冠 一 ㇇冠 尸 尸冠 尸 尸冠 冫 冫冠  
 穴 穴冠 竹 竹冠 艸 老冠 雨 雨冠  
 脚は漢字の下部にある部首にして、收筆に屬す。  
 小 下心 日 平日 水 下水 灬 連火  
 垂 漢字の上部より右側に垂れ下りたる部首にして、起筆に屬す。  
 厂 雁垂 广 麻垂 疒 病垂  
 遶は漢字の右側より底部を包み遶れる部首にして、多く收筆に屬す。

乙 乙遶 儿 人遶 几 几遶 夂 夂遶 夂 延引遶 支 支遶





H. N. S.

N. D.